
星魔導伝説

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星魔導伝説

【Nコード】

N8560M

【作者名】

マテマテフェイ

【あらすじ】

突如ミッドチルダ内で起きた謎の事件

そして新世界の鍵として、レイジングハートが奪われる

プロローグ新世界への鍵（前書き）

これは続・聖剣士伝説リリカルなのはの続きです

プロローグ新世界への鍵

第1管理世界ミッドチルダその世界では最近妙な事件が起きていた

「これでもう被害者は7人目か…」

「でも相手は何が目的なんだろうね。リンカーコアでもデバイスでもないし金目当てでもなさそうだけど」

「なにがどうあれ向こうの考えは読めねんだ。今はこうして少しでも情報を集めるしかねえだろ」

スウェンが言うのと携帯が鳴る

「聞こえる？スウェン、なのは」

「どうかしたのかフェイト？」

「今8人目の被害者の場所にいるんだけど…殺されてるんだ」

フェイトの言葉に驚き、スウェン達は向かう

「とうとう人殺しか…」

スウェン達の目の前にはすでに息絶えた魔導師が倒れていた

「ますます何が目的かわからねえな」

「なにも奪われてないもんね」

なのはが魔導師を触っていると突然なのはを捕まえる

「ようやく見つけた…レイジングハート」

「あいつの狙いはなのはじゃなく、レイジングハートか」

スウェンは男にバインドをかける

「これで身動きはできないだろ…お前の狙いはなんだ」

「我々の世界、星降る世界」

男が言うのとレイジングハートは消える

「あれは鍵…新たな新世界を開ける為の」

「新たな新世界だと…どう言う事だ」

スウェンが聞くが男はそれ以来ピクリとも動かなかった

第1話目的…

レイジングハートが奪われて1週間。犯人は相変わらずわからないままだった

「どうだコーノ、追跡できそうか？」

「一応いろいろな方法試しているんだけど…これも駄目か」

コーノは色々考えながら、犯人の足取りを追っていた

「さて、どうする」

「一応、コウ君が搜索はしてくれてるんやけど、なかなか見つからないらしいんや」

「コウでも探し出せないとなると…結構凄腕だな」

スウェンが言うとフェイトが来る

「どうだった犯人わかった？」

「全然だな。何より情報が少なすぎる」

「確かに、もう少し特徴がもう少しはつきりとわかればまだ探せるけどね」

コーノが言うとなのはから連絡が入る

「スウェン君、フェイトちゃんちよつと来てくれる？」

二人はわけのわからないまま指定された場所へと来る

「あなた方ですね。我々の事を嗅ぎまわっている鼠は…」

「お前達の目的それと名を名乗れ」

「我々の目的は星降る世界へ行く事です」

「その為にレイジングハートが必要なのか？」

男は頷く

「そして後一つバルディッシュが必要なのです」

「…!!」

男はフェイトに手を伸ばすがスウェンに止められる

「フェイトに触れるな!!」

「なるほど…」

男は笑いながらスウエンを見る

「私の名はゼツカ・シャベルンまた会える日を楽しみにしてますよ。
スウエン・レイク」

「何故、俺の名を…」

スウエンは止めようとするがすでに消えていた

第2話二人で過ごす時間

「くそ…逃がしたか…」

スウエンはゼツカが消えた方を見る

「今は彼らの目的が分かっただけでも良しとしよう」

「そうだな…それじゃ今のデータをユーノに送っておく」

スウエンはクライスソウルを使いユーノにデータを送る

「これでひとまず安心だな!？」

スウエンがフェイトの方を振り向くと、左腕に激痛が走る

「うわああああ」

何とか、痛みを抑えようとスウエンは左腕を抑えるが、痛みは治まらず、変な紋章が浮かび上がる

「ハアハア…なんだこの紋章…」

「スウエン平気？」

「何の問題もない。すぐに時空管理局に戻るぞ」

スウエンは言うが明らかに体調は優れていない顔だった

「スウエンあまり無理しても駄目だよ。クロノやユーノに私から言うておくから一度家に帰ろう」

「だが奴らの目的がはっきりした以上このまま行動を起こさない訳には…」

「私はスウエンに死んでほしくもないし、無理をしてほしくないんだよ!！」

フェイトに言われスウエンは自分達の家へと戻る

「済まなかったフェイト。俺はまた自分自身のせいで、大切なものを無くすところだった」

「わかってくれればいいよ。もう無茶はしないでね」

「ああ、約束するよ」

「絶対だよ。私を置いてかないでね」

フェイトはスウエンを見て言う。スウエンはその後笑顔で絶対に…

と言って布団に入る

「ぐうう…なんだこの痛み誰かとシンクロしてるのか？」

スウェンは左腕を掴みながら言う

「どうしたのスウェン！？」

「来るな…フェイト」

スウェンの左腕から出る光は真っ直ぐになのはの入院している病院へと続く

「うわあああああああ」

「スウェン…今、助ける！！」

フェイトはバルディツシュで斬りかかるが弾かれる

「クツ…AMFそれもかなり高性能の…」

「止める…フェイト死にたいのか…」

スウェンの言葉を感じ取り、フェイトはスウェンを見上げる

「スウェン…まだどこかへ行くの？」

「平気だ。フェイト…何時だってどんな時だって繋がってるからな」
スウェンはだんだんと光になって行く

「なのはが目を覚ましたら渡してくれ…」

「でも…スウェンそのデバイスは、選ばれた者にしか使えない筈…」
「きつと、なのはならそいつの真の力を使いこなせる筈だ。今のなのはなら…」

スウェンは光になりその場にはクライスソウルだけが残った

第3話星降る世界の伝説

あれから1週間なのは回復し、時空管理局へと来ていた

「それでどこまでわかつてるの？」

「奴らの目的は大体わかった」

ユーノは後ろの画面にある書物に書かれた事を出す

「聖なる星光の光と闇を切り裂く雷光の雷束ねる時、未知なる次元が開かれん」

ユーノが言つとみんな驚く

「でも私達が二人のデバイスを持ってても何も起きませんでしたよ」

「おそらくもう一つ鍵があるんだ起動コアともいうべき鍵が…」

ユーノはその後ある仮説を出す

「僕の考えが正しければスウェンの力は必須だ。そしてなのはとフエイトどちらかの血が必要なんだ」

「それどういう事？」

「簡単に言つと聖剣士の力は想いを力に変えるものだとなったよね。それと同じく二人の持っているデバイスもそれとほぼ同等の力が出せるんだ」

「だがその代わり魔導師は死ぬ。それが今、俺たちがここにある資料全部使つて作り上げた仮説だ」

コウが言つと皆静まり返る

「それも少し違うぞ。ユーノ」

突然、スウェンの声が聞こえる

「びっくりさせて悪い。俺の意識は今なのはと共にあるんだ」

「それどういう事？」

フエイトに聞かれスウェンは話す

「俺はあのままじゃあいつらの言いなりだった。そしてそれを回避するにはこれしか手がなかったんだ」

「でもなんでなのは？」

「なのはの右腕を見る。俺と同じ紋章がある筈だ」

スウエンに言われたとおり右腕を見ると確かにあった

「それと星降る世界の伝説を話してやるよ。俺は元々この世界の人間じゃない」

その後色々な事を話す

「つまりスウエンはその星降る世界の人間なんだ」

「ああ、だから聖剣士の力が俺にはあるんだ」

「でもどうやってこの世界にきたの？」

「さあな、それに俺は戻りたいとも思わないし何よりあの星は危険だ」

スウエンが言うときゼツカが来る

「やはりあなたはあの世界の住人でしたか」

ゼツカはなのはに近づく

「クツ…なのはの体じゃ抵抗もできないか…」

「どうしたのですか。スウエン・レイク」

なのはを掴みゼツカは言う

「私はあなたの意識だけ欲しいのですよ」

「なにっ!？」

ゼツカが腕をなのはの頭の前に出すとスウエンの意識が飛び出す

「私の目標は達成した。フフフハハハハ」

ゼツカは笑いながら消える

第4話開かれし次元の扉

「みんな無事か…」

「私達は平気だけどスウェンとバルディッシュが…」

「まずいな…スウェンだけならまだしもバルディッシュまで取られるとは」

コウ達は悩む

「でも実際にどんな事が起きるの？」

「僕達の予想ではこの世界を崩壊させるほどの次元震が起きる筈だ」
ユーノが言つとなのはの目に痛みが走る

「何この痛み…」

なのはが触ると目から血が出ていた

「止めて…その扉を開かないでええええ」

「なのはどうしたの？」

フェイトが近づくとフェイトからも血が出る

「どうなってるの私の体に何が…」

その頃、とある次元

「ようやくピースはそろった。さあ始めようじゃないか新世界の幕開けだ！！」

「貴様に力を貸す気はない…」

「いやでも貸してもらうぞフッフ」

ゼツカはスウェンを掴み自分の体内へと入れる

「私が手に入れようと問題はない筈だ」

「止める…この世界を壊したいのか！！」

「貴様だって戻りたいだろう故郷に！！」

「すべての世界を壊してまで戻りたいとは思わない。それに俺はこの世界で大切なものを見つけた」

ゼツカに言つとゼツカは笑う

「我は行く何があるうとあの世界こそ求めた真の世界だからだ」

遂に新世界への扉が開かれる

第5話呪われし名

「ハハハ…我が求めた新世界が我の前にクククハハハ…」

ゼツカは笑いながらスウエンを見る

「貴様のその名レイクは、呪われし名なのだろう？」

「貴様…一体どこまで知っている」

「さあどこまでだろうな。それに、この事実を知っても彼らはまた手を差し伸べてくれるかな」

「……………」

スウエンは黙る

「まあ今となっては些細な事だがな」

「俺は…」

「貴様の呪われし力、その力は全ての人々に不幸を呼ぶ。今すぐ命を絶つ事を勧めるがね…」

「確かにこの力で多くの人間を傷つけてきた。だがこの力は人々を救う事もできるだから俺は…」

ゼツカはスウエンを転移させる

「貴様たちの絆、見せてもらう。私の探すものは貴様らの中にもあるかもしれないから…」

スウエンが消えた後、ゼツカは次元の扉を閉め星降る世界へと行く

「スウエン無事だったんだね…」

「俺が生きているせいでこんな事になったんだ」

「スウエン君は悪くないよ。それに世界は崩壊しない」

「だが俺は…これ以上この力で関係のない人々を巻き込みたくない……………」

スウエンは涙を流しながら言う

「だからもう終わらせよう」

「そして新しい一步を踏み出すんだ」

なのはとフェイトは言う

「お前の生まれがどうであれ、お前は俺たちの仲間だ」

「そうやで。それに私らが力を合わせれば何でもできるんや」

「確かに人一人の力は弱いけど、それを大きくするのは想いだからね」

「みんな…まだ俺に力を貸してくれるのか」

スウエンが言うとは皆は笑う

「そうだよ。まだ僕達は滅ぼされる訳にはいかない」

「多くの人が守ったこの世界今度は私達を守るんだ」

「行こう…私達の住む場所を守るために…」

「メシアやノルンが愛した星を守るために俺は今一度この力を使う
！！」

スウエンは決心をし空を見上げる

「だが今は崩壊を止める事が最優先だな…」

「でもどうやって!？」

なのはが聞くと空から消えた筈のノルン、メシア、スサノオが来る

「この次元世界終わらせはしません」

「我の愛したものを今度は壊させはせん!!」

「スウエン、次元世界の事は僕達に任せ君達は急いで星降る世界へ
行くんだ」

「わかった…メシア、ノルン、スサノオここは任せた」

スウエン達は先を急ぐ

「なのは、フェイトあなた達に渡すものです」

「これは…レイジングハートにバルディッシュ?」

「スウエンの事よろしくお願いしますね」

「はい!」

なのはとフェイトも返事をしてスウエン達の後を追う

第6話星の鼓動

スウエン達は星降る世界へと来た

「本当に星が降り注いでる…」

「スウエン、一体どこにいますか？」

「場所は判明している。だがそこに行くまでの道が分からない」

スウエンが言うとなのはの持つレイジングハートが光りだす

「いきなりどうしたの…」

「なのは腕を見せてくれ」

スウエンが腕を見ると星の人の紋章が浮かび上がっていた

「これで奴の後を追う事が出来る」

「どう言う意味？」

「なのはの腕に出ている紋章は実際は俺にもあったものだ」

スウエンが説明すると納得する

「だがなのはの紋章一步間違えば死ぬからな」

「平気だよ私にもわかるこの星はもうすぐ死ぬ…」

「何だと…」

「何か問題でもあるの？」

フエイトが聞くとスウエンは再び説明する

「この星が死ぬと他の星も消滅していく」

「それじゃいずれはミッドチルダも…」

「まずいな…なのは完全に止まるまでどれぐらいの猶予がある？」

「後4時間29分ぐらいかな」

なのはが言くとスウエンは考える

「それまでに何とかゼツカを倒しコンタクトを取らなければ…」

「だがどちらにせよ時間がないのだろう」

「そうやでこうしてる間にもこの星の鼓動は弱まっとるやろ」

はやて達に言われスウエンは最短ルートを割り出す

「ここから先、死人が出るかもなだが俺たちには時間がない。ここ

は強行突破で行くぞ」

「でも誰が戦闘するの？」

「俺とフェイトそれにコウで敵は倒すだが無茶はするなよ」

スウェンが言くと皆、頷く

「必ず守り通す皆が笑って過ごせる未来を！！」

スウェンが言くとクライスソウルは光り形を変える

第7話想いが生む力前編

「見つけたぞ…ゼツカ!！」

「案外、早かったな」

「あれが、この世界のコア…」

「ほう、なるほど。星の力を持った者がいたのか」

ゼツカはなのはを見ながら言う

「それによく死人を出さずに来れたな」

「当たり前だろ。皆で帰らなきゃならねえんだからな」

「それでは始めますか…」

「人を否定したものが勝つか、それとも人を信じた者が勝つか」

スウエンはクライスブレイカーを持ちゼツカを睨む

「さあ来い!」

「うおおおおお」

スウエンは斬りかかるがゼツカは霧になり消える

「何だ手応えがない…」

「どうしたその程度か」

「グッ…」

スウエンは飛んできた衝撃波を何とか避ける

「斬れないなら遠距離魔法だ!！」

スウエンはクライスブレイカーのモードを変える

「行くぞ…シューティングデイバスター」

「そんなものでは我はやれません」

ゼツカは受け止めスウエンに撃ち返す

「何…」

スウエンは吹き飛び動かない

「がっかりだな。やはり人間など信じるに値しないものだ」

ゼツカはなのは達に向けて集束砲を放つ

「えっ…そんななのは達に向けて」

「クツ…ここからじゃ間にあわない」

「ククク…消える!!」

ゼツカが言うとなのはは目をつぶるが魔力砲が届く事はなかった

「スウエン!!」

「そんな体でどうするといのですか」

「グツ…負けるかああああ」

スウエンはクライスブレイカーのバリアで何とか耐えるが、限界が来てるらしくバリアがだんだんと弱くなる

「消える呪われし人間がああああ」

ゼツカはさらに放出する

「もう止めて…このままじゃ」

「うおおおおお」

スウエンの持つクライスブレイカーにひびが入る

「必ず守る守り通す!!」

「何だこの魔力、奴のどこにこれだけの魔力が」

スウエンはゼツカの放った集束砲を打ち消すが、クライスブレイカーは砕け散り残った少しの魔力砲がスウエンの左目を貫く

「ぐわああああ」

スウエンが左目を抑えると、ゼツカに心臓部を撃ち抜かれ血を流し倒れる

「俺は…まだ何も…」

「フフフハハハこれで奴の血は絶った。我はこの世界で唯一無二の存在となった」

「そんな…嘘だよ。スウエン目を開けてよ」

フェイトは動かないスウエンを抱き泣く

「貴様も逝かせてやるよ。そいつと同じ所へな」

ゼツカが撃とうとすると横からピンク色の魔力砲が飛んでくる

「まだ邪魔をするものがいたか」

「あなたはもう許しはしない。私の全てを持ってこの世界から滅ぼしてあげるよ」

「貴様にできるものならな」

「できるよなら今、証明してあげようか」

なのははレイジングハートを出しゼツカへと向かう

第8話想いが生む力後編

「凄い…なのは押してる」

「どうしたのその程度。もっと楽しませてよ」

「なんだこいつの魔力、底が見えない」

ゼツカはなのはに押されていた

「今のうちにスウエンを見よう」

なのは以外のメンバーは全員スウエンのもとへ集まる

「これ生きてるんか？」

「いや即死だろ。心臓撃ち抜かれてるし」

「でもまだ一応生命反応はある。治療魔法ができればまだ行けると
思うけど」

「シヤマルはおらんし、自然治癒を待つしかないんじゃないか」

はやて達が話していると凄い轟音が響きわたる

「どうしたのその程度ならもう決めるよ」

「何だあの魔導師、強すぎる」

「それじゃ止めと行こうか…」

なのははゼツカの動きを止める

「スターライト…ブレイカー…」

ピンク色の魔力砲にのまれゼツカは倒れる

「残念けどまだ終わらない。スラッシュモード」

なのははレイジングハートを剣にしゼツカへ斬りかかる

「スターライトザンバー!!」

「グッ…だがこの程度で我が消える訳が」

ゼツカはなのはの振り下ろした剣を抑える

「貴様らに殺される我ではないわ」

「クッ…」

なのはが距離を置くと姿が変わる

「貴様らは皆殺しだ」

ゼツカが言つと背中^の羽^が斬^{られ}る

「何者だ…」

「魔導剣士」

「ふざけた事を…」

ゼツカは魔力砲を放つが回避され、腕を切り落とされる

「貴様ああ」

「悪いな、加減できないもんで」

「調子に乗るな!!」

「俺はこんな奴にやられたのか…泣けてくるな」

魔力砲を乱反射するが一発も当たらず、もう片方の腕も斬り落とされる

「もう決めにさせてもらう。なのは、レイジングハートを渡してくれ」

「うん…後はよろしくね。スウェン君」

「任せとけよ」

スウェンの周りに魔力が集中する

「我はまだ消えたくはない」

「悪あがきはよせ。俺が今、救つてやる」

スウェンはレイジングハートを剣状態にし、投げ最後に斬りぬける

「あばよ…ゼツカ憧れの地で安らかに眠りな」

スウェンがゼツカを倒すと崩壊が始まる

第9話新たなコア

「さてもう時間か」

「急いで脱出しよう」

「悪いが俺となのははまだやる事がある」

「必ず戻るから、先に帰ってて」

なのはとスウェンに言われフェイト達はミッドチルダに戻る

「でも本当にいいのか。下手をしたら帰れないぜ」

「そうなくてもスウェン君は傍にいてくれるんでしょ」

「まあ、そうなるな」

スウェンとなのははコアへと近づく

「俺が合図したら腕を入れてくれ」

「うん。わかった」

スウェンはなのはに言うと、体の中から聖剣士の力を抜きクライスブレイカーへと入れる

「俺はこれでただの人間だ。銃で撃たれれば死ぬし、心臓を刺されれば死ぬ」

「でも魔法は使えるんでしょ」

「まあ、デバイスがあればな」

スウェンはなのはと話しながらクライスブレイカーをくぼみに入れる

「なのは、腕を入れてくれ」

「うん、わかった」

なのはが腕を入れると魔力のカーテンが二人を包む

「あなた達は何故、ここに？」

「ホシガミ、お願いがある。この次元世界にはまだ色々な神秘が溢れている。だからこの世界の崩壊を止めてくれないか」

「私一人の力では無理です。あなた達にも力を貸してもらいますよ」

ホシガミはスウェンとなのはを見て言う

「ああ、俺たちならもう覚悟はできてる。この世界と運命を共にす

る準備はな」

「あなた達には待っている者がいます。それでもいいのですか」

「決意は変わりません」

なのはが言うとメシアやスサノオ、ノルンが来る

「ホシガミ我々では駄目ですか」

「問題はないと思いますが、あなた方はこの世界の一部となるのですよ」

「我は学んだ。人は悪いものだけではない。それにこの次元世界終わらせるには惜しいしな」

「僕もスサノオやノルンと同じ気持ちだ。人はまだ進化できる」

ノルンやスサノオたちが言うとホシガミは納得する

「わかりました。私も人を信じます、あなた方がいるのなら平和な世界でしょうしね」

「じゃあなスウェン、今度こそ本当のお別れだ」

「貴様とは一度決着をつけたかったが、こんな最期もいいだろう」

「それではスウェン仲間達を大事にしなさい」

ノルン達は消え崩壊も止まる

「綺麗な世界だね」

「ああ、俺たちも帰るか…」

「うん!!」

なのはとスウェンも帰る

第10話平和の犠牲

「何とか帰ってきたんだな。グッ……!？」

「本当に平気、スウエン君」

「問題はない筈だ」

スウエンは聖剣士の力が抜けた事により、体のバランスが取れなくなっていた

「どうしても無理ならここで待っててもいいよ」

「いや、俺も行く」

スウエンは言う事を聞かない体に鞭を打ち、なんとか歩きだす

「でもスウエン君、無理はしない方がいいよ」

「俺なら平気だ。急いで行くぞ」

二人は時空管理局へと向かう

「ねえ、スウエン君……」

「どうしたんだなの？」

「今でもフェイトちゃんのこと好き？」

「何だよ。突然……」

スウエンが言うとなのはは空を見る

「いやただふつと思っただけ……」

「俺にもよくわからない。聖剣士の力が抜けたせいなのかは分からないがなのは以外の顔を思い出せないんだ」

「それって記憶喪失？」

「まあ会えばわかるだろう。急ぐぞなのは」

スウエンとなのはは自分達の帰る場所へと急ぐ

「ねえ、スウエン君。私、思っただけこのまま海鳴に行つて魔導と無関係で生きるのはどうかな」

「その選択肢もありだな。でも俺は……」

スウエンは空を見上げ涙を流す

（俺の記憶はだんだんと消えている。いずれはなのはの事もわから

なくなるのか…)

「もう目の前だよ。急ごう」

スウエンはなのはに引つ張られ、時空管理局の中へと入る

「スウエン、それになのは」

「ただいまみんな」

「……………」

スウエンは何もしゃべらない

「スウエン、無事だったんだね…」

(これは…誰だ。だがこの感じは覚えてる)

スウエンは何か思い出そうとするが、全然思い出せない

「フエイトちゃん。今のスウエン君は急いで医者に見せないとなら
ないんだよ」

「そうなんだ。なのはは平気なの？」

「私も一応検査だけするから、一緒に行ってくるよ」

「よろしくね…」

フエイトに手を振りスウエンとなのはは病院へと向かう

「さっきのがフエイトちゃんだよ」

「そうだったのか…」

スウエンは目まであまり見えなくなっていた

「急ごう。後、少しだから」

なのははスウエンを引つ張り病院へと入る

「あの…すいません。検査をお願いしたいんですけど」

「はいわかりました。それでは、あの奥の部屋からはいってくださ
い」

なのははスウエンは奥の部屋に入り診察を受ける

「あなたのほうは何の問題もないですが、こっちは彼の問題が多
すぎて、この病院じゃ調べきれないね」

「そうですか…わかりました」

なのははスウエンを抱え部屋を出て行く

(こんなに軽かったけ)

なのは疑問に思いながら、スウェンをユーノに見せる

「聖剣士の力が抜けたんだよね」

「そうだけどどうかしたの？」

「このままじゃスウェンは死ぬ。そうじゃないとしても全ての記憶を無くすはずだよ」

「それを防ぐにはどうすれば…」

なのはがユーノに聞くとスウェンがなのはを見て笑う

「なのは…ユーノ…ありがとう…」

「スウェン君まだ消えちゃだめだよ。何の為にここまで生きたの」

「なのは…もう無理だよ」

ユーノはなのはの肩を叩く

「もう彼を休ませてあげよう。今まで僕達の為に戦ってくれたんだから…」

「でもそれじゃ…フエイトちゃんが…」

ユーノを見ると目には涙が溜まっていた

「僕だって悲しいよ。でもこのまま全てを忘れるより、少しでも思い出を覚えて死んだ方が幸せなんだよ」

「でもそれじゃ…本当の幸せとは言えないよ」

なのはが言くとスウェンはなのはの手を取る

「みんなによろしくな…」

「スウェン君私達は君の事を待つ。だから必ず戻ってきて、絶対に皆を悲しませないで」

「なのは達は俺にはもつたいない仲間だったな」

なのはを握っていたスウェンの手が急激に冷たくなる

「なのは…行こうもう目覚めないよ」

ユーノは出て行くがなのはは、スウェンの傍を離れずスウェンの腕を持つ

「私はスウェン君に選ばれなかったけど、今でもこの気持ちは変わらない。大好きだよスウェン君」

なのはは冷たくなった。スウェンの唇にキスをして部屋を出て行く

第11話人が生きる意味

あれから1週間。なのはは時空管理局へ来なかった

「なのはママ今日もご飯食べてない」

「あれから1週間ずっと部屋に閉じこもったまま、下手をしたら死んでいるのかもしれないね」

セイが言うといいはいは部屋の前を叩く

「なのはママ死なないで」

「嘘ですよ。生命反応はあります」

セイはセイの肩を叩き言う

「それからマスターに手紙です。一応、目を通しておいってください」
セイはセイを連れなのはは部屋の前から去る

「私は何をしているんだろう。こんな事をしても何の意味もないというのに」

なのはは部屋のドアを開け、ご飯と手紙を取る

「ユーノ君とフェイトちゃん結婚したんだ…」

なのはは涙を流しながら、次の手紙を読む

「それにコウ君にはやてちゃんか…」

なのはは次々と手紙を読み、ご飯を食べる

「私が生きている意味ってあるのかな…」

なのははご飯を食べ終え、部屋から出てある場所へと向かう

「彼が消えてから一切変わってないな」

なのはの前にはスウェンの家があった

「本当にここでは色々な事があったよね」

なのはは色々と思ひだし、涙を流す

「初めてミッドチルダに来た時は、フェイトちゃんやユーノ君達でこの家に来たんだよね」

その時の事を思い出して笑みを浮かべる

「あの時は楽しかったな。皆でスウェン君をからかったりして」

なのはしばらく歩くと写真を見つける

「これってあの時の写真だね」

その他にも周りには大量の写真があった

「スウェン君。やっぱり本当に皆の事が、好きだったんだ」

なのはが写真を見てみると、何か光輝くものが見える

「何だろ…これ？」

なのはが手に持ったものはデバイスのようだが所々破損しており、
単なる宝石のようにも見えた

「なにかはよく分からないけど一応、持っておこう」

なのはがポケットにしまい手紙を見つける

「これって彼が書いた手紙だね」

そこに置いてある手紙はなのは宛てだった

「なんでフェイトちゃんじゃなくて私に…」

なのはは封を切り、中の手紙の内容を読み涙を流す

「スウェン君…本当は私の事思ってくれてたんだ…」

その後、家を出て自分の家へと戻る

「あっなのはママお帰り」

「ようやく私の知るマスターに戻りましたね」

「ごめんね。二人とも迷惑かけて」

「お礼ならマスターを心配した全員にしなさい」

セイに言われなのはは自分の部屋へと入り準備をする

「人が生きる意味。それは人それぞれだけど、私は大切な人と歩む
ために生きているんだと思う。だから人はどんな困難にぶつかって
も生きる希望を見失わずに生きていけるんだと思うんだ」

なのははレイジングハートを持ち時空管理局へと急ぐ

第12話 奇跡の魔法

「なのは、久しぶり」

「うん、おめでとうフェイトちゃん。ユーノ君と結婚したんでしょ」

「えっ…まだ付き合ってるだけだけど、それとはい。これ」

フェイトに手渡されたのは七色に光る羽だった

「これはなのはにあげるよ。もう必要のないものだから」

「えっでもだってこれは…」

「私はスウェンとは友達でいいんだ」

「わかった。一応、貰っておくね」

なのははフェイトにお礼をして先を急ぐ

「でも本当にいいのかい。フェイト」

「いいんだよアルフこれで…私は後悔はしてない」

「でもスウェンが目覚めるかが、問題だけどね」

「今のなのはなら目覚めさせられるはずだよ。彼をね…」

フェイト達はなのはのほうを見つめる

「ようやく着いた…」

なのはは部屋の前でとまる

「今、行くからね…」

なのはが入ると機械の音だけが聞こえた

「迎えに来たよ…」

なのはが触れると相変わらず冷たいままだった

「私、あれから色々考えた。でもやっぱり私はこの世界であなたと

暮らしたい」

なのはの目から涙がこぼれおちる

「私はもう一度…ずっと一緒にいたいんだ」

なのはの想いに答えるようにレイジングハートが輝き始める

「もう一度、名前を呼んで」

なのはが言っているとレイジングハートとポケットの中のデバイスが共鳴

する

「何が起きてるの？」

なのはが驚くと目の前に色々なものが見える

「アリシアちゃんに、フェイトちゃんのお母さんそれに…スウェン君のお母さんとお父さん？」

なのはは幻覚でも見ているのかと目をこするが消えない

「大切なのは信じる心」

「そして強く願う事」

「自分自身の想いを」

「彼にぶつけてください」

アリシア達に言われなのははスウェンに向きなおる

「今、はつきりとわかった。この気持ちは本物だって、だから一緒に生きようスウェン君！！」

なのはが言々とアリシア達はスウェンを囲む

「人の心の素晴らしさを見せてもらいました」

「もうこれで思い残すことは何もないわ」

「彼の意識が目覚めたら支えてくださいね」

「お互いがお互いを思えばそれが魔法だよ」

皆は笑顔になり消える

「スウェン君…」

なのはが涙を流すと暖かい手がなのはの頬を触る

「なのはの想いが、奇跡を起こしてくれたんだな」

「スウェン君。本当に夢じゃないよね」

なのはは涙をふきスウェンを見る

「お帰りスウェン君…」

「ああ、ただいまなのは…」

なのははスウェンに抱きつき泣いた

第13話新たな旅

辺境の地ザンガウスそこは誰も近寄らず、遂には忘れられた場所。だがそんな場所で何かが動き出すなど誰にも予想はできなかった

「今日でこともお別れか…」

最後に見おさめ他の世界へと急ぐ。星降り事件より2年後スウェンは世界をこの目で見る為に各世界を回っていた

「俺が皆から許可をもらって旅をしてもう半年か」

ベンチを見つけ、座り荷物を整理する

「みんな…元気かな…」

頭の中にはなのはやユーノ達が浮かんでくる

「さてもう行くか…皆にこれ以上迷惑をかける訳にはいかないしな」
荷物を持ち立ち上がると、後ろから殺気を感じる

「この一撃を避けたか」

「お前は一体何者だ？」

「星の断罪者」

「何…」

驚くと同時に斬られ、スウェンは血を流す

「何だ…確かに避けた筈…」

「驚いているようだな」

「お前の刀、それは一体？」

「貴様とこれ以上話す事などありはしない」

姿が消え、次の瞬間にはスウェンの目の前へと現れる

「クッ…」

何とか避けるが、前髪にかすり髪が落ちる

「中々しぶといな…聖剣士の力もないというのに」

「貴様、何故、聖剣士の事を…」

「私にも都合と言うものがある。早々に終わりにさせてもらっ
男が踏み込むとスウェンの前に何者かが現れ斬撃を止める

「まさかこんな所で巡り合うとはな」

「もう止めてくれゼロ。何がお前を変えたんだ」

「これも全ては星の導きだ」

「どうしても彼を殺さなければならぬのか」

言葉も聞かずに斬りかかる

「お前は何を見たんだ。あの禁断の地で」

「貴様と話す事などない。俺の使命は奴を殺す事だ」

再びスウェンへと斬りかかるが止められる

「例え貴様でも、邪魔をするなら容赦しないぞ」

「お前は何故こんなことを平然とできる？」

「俺は貴様とは違う。全ては星の民の為だ」

星の民その言葉にスウェンは覚えがあつた

「だがどうやら俺も時間のようだ」

武器をしまいスウェン達に紙を投げる

「もし俺を追う気があるなら来い。何時でも待つてやる。それと

貴様の仲間はまだ俺の仲間が殺しに行った」

「貴様……」

「だが今から行けばまだ間に合うかもな」

転移魔法が発動しゼロはその場から消える

「待て……グッ……」

傷が痛みスウェンは倒れる

「傷が痛むのか？」

「奴の太刀筋、見切っていたつもりだったが……どうやら俺もまだまだのようだな」

「君は確かに彼の太刀筋を見切ってはいるが、それだけじゃ彼には勝てない」

「何か秘密があるのか……」

男は頷く

「だが彼の秘密を教える前に、君の仲間を助けないと。僕はロイト・クオンよろしく」

「俺は高町スウェンだ。よろしくなロイトそれであのゼロとはどういう関係なんだ」

「彼と僕の事は道中で話す。今は一刻も早く君の仲間を助けるのが優先事項だしね」

「お前には関係ないのに助けてくれるのか」

スウェンが聞くとロイトは僕にも君に協力する意味があると言い二人はミッドチルダへと急いだ

第13話新たな旅（後書き）

新キャラロイトの紹介

所持デバイス、イフリート 炎を出すデバイスで剣、槍、銃の3形態に変形することが可能

性格は弱気であり戦闘を好まない。今は訳あって、時空管理局には属さず魔導師として世界中を旅している

苦手なものは女性で好きな事は一人旅

趣味は観光地巡り

魔導師としての腕も高く大体今のスウェンと同等の強さを持つ

第14話狙われた仲間

第1管理世界ミッドチルダ

「クツ：これ以上、行かせはしない」

「無駄な血を流すという訳ですか」

魔導師がデバイスを構えると、何が起きたのか分らず血を流す倒れる

「無駄な時間はかけられないのです」

ターバンで姿を隠した女性が刀をしまうと、魔導師から何かが出て女性はそれを受け止める

「まあ一応、魔導師と言う訳ですか」

「リンカーコア。摘出完了」

「それじゃ私の本当の任務を遂行しましょうか」

女性はその場から消えそのすぐ後にフェイトとティアナが来る

「これで二人目ですよ」

「やっぱり死ぬ直前にリンカーコアが摘出されてる。同一犯とみてまず間違いはなさそうだね」

「でも敵の目的はなんなんですかね」

「少なくともスウェンが狙われていない事はわかった」

デバイスを出しフェイトは通信をする

「聞こえる…なのは？」

だが返ってくるのはノイズだけだった

「なのはが…危ない」

フェイトが向かおうとすると何者かが転移してくる

「君達がスウェンの仲間…なんですか？」

「そうだけどあなたは…」

「僕はロイトです。今は訳あって彼に協力をしているんです」

「そうなんだ、私はフェイトこっちはティアナだよ。よろしくね」

フェイトが手を差し出すが、ロイトは後ろへ下がる

「僕は女性が苦手なもので…」

「ごめん知らなかったから」

「いえ別にこうして話すのは一応、平気なんで」

その後、フェイトとティアナはロイトに話を聞きななのもとへと急ぐ

「どうしたのですかそれで終わりですか？」

「彼女、一体何者？」

「抵抗しなければあなたは殺しません。私の目的は…」

女性はヴィヴィオを見る

「その少女をおとなしく渡しなさい」

「ヴィヴィオは渡さないどうしても欲しいのなら力づくで奪い取ってみれば」

「あなたがやろうとしている事は勇気ではなく無謀です。そんなに死にたいのなら止めを刺してあげましょう！？」

突然、女性は倒れる

「危ないところだったな」

「スウェン君なんで急に？」

「安心して旅もできなくなったし、仲間のピンチはほっとけないからな」

「でもいいの、聖剣士の力も失われてるのに無理をして」

なのはとスウェンが話し合っていると女性は立ち上がる

「不意打ちで私を倒せるとでも思ったのですか」

「そんな事は最初から思ってたねえよ」

スウェンはデバイスを構え戦闘態勢に入る

「私とやる気ですか？」

「お前を倒して星の民の事を聞き出す」

スウェンが言う女性スウェンに近づく

「ならばこうしましょう。私が勝てばあなたは私のもの、あなたが勝てば今まで殺した魔導師の復活+星の民の情報、どうです悪い条件ではないと思いますか」

「いいぜ、俺はその条件で」

「ならば決まりですね。行きますよ」

「みんなの為に俺は負けられない」

スウェンの体の中で異常が起き始める

第15話刻印

「君は色々な世界を回ってたんだよね。何の為に…？」

「僕は昔は星の民について、調べていました」

「星の民？」

聞きなれない単語にフェイトはロイトに聞きなおす

「星の民とはその名の通り星と話す事ができ、星の力を借りることができます」

「それでなんで星の民の事を調べていたの？」

「それは星の民の事が分ければ、父さんが助けられると思ったからです」

「君が旅をする理由はお父さんを探す為？」

ロイトはデバイスを出し二人を先に行かせる

「あれは僕が倒さねばならない敵です」

「でも1人より3人のほうが」

「いいえ、彼にはあなた方の攻撃は一切通用しません。そしてきつとあなたの仲間のほうが危険です！ここは僕に任せてもらえないでしょうか」

「わかったよ…でも必ず生きて帰ってきてね。まだあなたの事を完全にわかった訳じゃないんだから」

フェイトが言くとロイトは頷く

「本当は君とも戦いたくはない、でもそうも言ってられない状況だし、すぐに終わらせるよ刻印解放！！」

赤色のカーテンがロイトを包みデバイスが変化していく

「行くよイフリートエンペラー」

「炎獄陣」

男を炎で包むが大したダメージは与えられない

「どうしたロイトその程度の炎では俺は焼き殺せはしない」

「クツ…リードなんで君まで」

「俺たちは聖剣士の力を欲している」

「それは彼、スウエンの力の事か？」

リードは頷きロイトにデバイスを向ける

「我がデバイスはコールドメフィス。全てを氷結させ一瞬のうちに砕く」

「だが今の僕のデバイスとリードのデバイスじゃ勝負にはならない」

「俺も星の力を手に入れてるとしたらどうだ…刻印解放!!」

水色のカーテンが包みデバイスが変化していく

「これが俺の新たな力コールドメフィスソードだ」

リードは物凄い速さでロイトを殴る

「グッ…この程度で負ける訳が…!？」

体の半分がすでに凍り付いていた

「ソードの力は一度水を噴射し、相手を濡らした後に凍らせる。だからお前のイフリートなど意味はないのだ」

「クッ…このままじゃ負ける」

「せめてもの情けだ。俺の最強技で殺してやる」

リードの周りに氷の刃ができる

「コールドゼノ!!」

ロイトに向けて一斉に氷の刃が飛ぶが全て叩き斬られる

「何者だ」

「私は烈火の将シグナム。主はやての命令で助けに来た、アギト奴の体についてる氷を溶かしてやれ」

「はいよ」

アギトはロイトについている氷を溶かす

「ありがとうございますシグナムさん、アギトさん」

「礼はいい。ただ、奴の事を教えてくれるか」

「彼はリード元々は僕達の仲間でデバイスはコールドメフィスソード。相手に水を発射した後凍らせるため並の火力じゃ太刀打ちできません」

「そっかなら行くぞアギト」

シグナムとアギトは融合し強さが増える

「今のあなたならこいつも使いこなせるかもしれませんね」

「だがお前のデバイスは…」

「今の僕じゃ足手まといになるだけです」

「そうかではありがたく使わせてもらう」

片方の腕にレヴァンティンもう片方の腕にイフリートエンペラーを持ちシグナムはリードと戦闘を繰り返す

「クッ…俺の魔力じゃ奴には歯が立たない」

「行くぞ…アギト」

シグナムが言っているとレヴァンティンをイフリートエンペラーのくぼみに差し込む

「何だこの異常なまでの魔力は…」

「決めるぞ…」

「獄炎斬!!」

「アイスフィールド」

リードは何とか耐えるが徐々にひびが入って行く

「こんな場所で俺はやられる訳には行かない…」

リードは全ての魔力を放出し何とか止める

「これで奴も魔力は底をついた筈!？」

目の前ではまだメラメラと炎が出ていた

「これで最後だ…」

「俺はまだ…星の使命を…」

シグナムが切り抜けるとリードは光となり消える

「やりましたね。シグナムさん、アギトさん」

「だが私のレヴァンティンはイフリートに取り込まれてしまった」

「僕にはまだデバイスがあります。そのイフリートもらってくれますか？」

「それは嬉しいがこいつの意思は平気なのか？」

シグナムが聞くとロイトはイフリートの中に何かを入れる

「それは刻印と言ってこのデバイスに眠っている真の力を呼び覚ま

「事ができるんです」

「そうなのか…それでお前はその後どうするんだ」

「あなたについて行きます。僕はまだこの世界の事はわからないので」

「それじゃ行くぞ…」

シグナムとアギトの後をロイトはついて行く

第16話暴走する想い

スウエンは本来の力を出せずに苦戦していた

「嘘だろ…クツ…」

「聖剣士の力がなければこの程度ですか」

目の前の女性はスウエンに向けて魔法を放つが何者かに弾かれる

「戦えねえなら下がってろ」

ヴィータに吹き飛ばされスウエンはなのはのほうへ行く

「スウエン君、平気？」

「俺は平気だでも…」

「もう無理して戦わなくていいよ。私は君を失いたくない」

スウエンの鼓動がだんだんと早くなる

「あなたには興味はありません。鉄槌の騎士ヴィータ」

「くそ、なんでだよ。全然手ごたえがない」

「当たり前です。あなたなどでは!？」

突如感じたばかりでかい魔力のほうを見るとスウエンが立っていた

「聖剣士の力もないというのに何故」

「うおおおおお」

スウエンは拳に魔力を集中させ思いつきりぶんなくる

「何だと…」

殴られ吹き飛び立ち上がろうとするが体が言う事を聞かない

「はああああああ」

再び拳に魔力を集中させ刃を作る

「うおおおおお」

スウエンは斬りかかるが突如現れたゼロに止められる

「セン、リードが負けたここは退くぞ」

「私は彼が欲しい」

「ならば…」

ゼロは急接近しスウエンに一撃を入れる

「これで問題はない筈だ行くぞ」

「それじゃ彼はもらっていくわね」

ゼロたちが逃げようとすると雷が落ちてくる

「クツ…邪魔立てするか」

「スウエンを置いて行ってくれますかそうすれば手荒な真似はしません」

「センそいつを返せ今やられる訳にはいかない」

「ゼロの力ならやれるでしょ」

センが言うといつの間にかロイトやシグナム達も来ていた

「確かにこれは分が悪いかもね」

「だからこれを使う」

ゼロはスウエンの体内に何かを注入する

「ぐわああああ」

「仲間同士でつぶし合いなさらばだ」

「今度は必ず殺してあげるから楽しみに待っててね」

「待ってくれゼロ、セン」

ロイトは止めるが二人は転移をするそしてなのは達の前には人間の心を失ったスウエンがいた

第17話人の心の奇跡

「グオオオオオ」

「ありや、まるで化け物だな…」

「うん。なんか禍々しい感じが感じない」

皆、自身のデバイスを強く握りスウエンを見る

「キシヤアアア」

「そんな直線的な攻撃で負けるかよ。行くぞ、アイゼン!!」

グラーファイゼンとスウエンの拳がぶつかり衝撃波が生まれる

「アイゼン!!ぶち抜けえええええ」

ヴィータはスウエンを吹き飛ばすがすぐに態勢を立て直し、再びヴィータへと挑む

「アイゼン行けるか!?!」

ヴィータがグラーファイゼンを見るとひびが入り砕け散る

「嘘だろ…なんでだよ」

「ヴィータちゃん、後ろ」

なのはの声で我に返った、ヴィータはスウエンに吹き飛ばされる

「ヴィータちゃん、平気?」

「高町なのは。あいつを救うなんて考えるな、その甘さを捨てる。

さもねえと次はおめえがやられるぞ…」

ヴィータは氣を失う

「グオオオオオ」

「ごめんねヴィータちゃん、でも私は彼と一緒に生きたいんだ。この世界で…」

なのはは立ち上がりスウエンを見る

「レイジングハートモードリリース」

なのはが言うとレイジングハートはもとの宝石に戻る

「なのは無茶だよ。デバイスなしなんて」

「彼は必ず私が受け止める。その全てをね」

「な…グワアアアア」

スウエンは苦しみだす

「スウエン君」

なのはがスウエンに近づくと切り裂かれる

「スウエン君…泣いてるの？」

「なのは…俺を殺せ」

なのはがスウエンの頬を伝わる涙をふくと声が響く

「そんな事聞ける訳ないじゃん。絶対に助ける、約束守ってもらうためにね」

「だが俺は…もうグウウウ」

スウエンはなのはを離し自分自身を自分で切って行く

「俺の意識が少しでも残ってるうちに…」

「私は必ず彼を助けるもう二度と失いたくはないから…！」

なのはの周りを星が囲む

「やっぱりそうか…彼女は星に選ばれし者だったんだ」

レイクはなのはに合っているデバイスを放り投げる

「初めまして私はスターフォースあなたに力を与えるべく来ました」

スターフォースに言われたとおりの事をなのははする

「刻印解放…！」

スターフォースは姿が変わり丸いくぼみができる

「そこにあなたのレイジングハートを入れてください」

「こう？」

なのはが入れると今度はピンク色のカーテンがなのはを包む

「スターフォースエクセリオン」

「これが私の新しい力…」

「さあ、あなたの想いを彼にぶつけてください」

「わかったよ」

スターフォースエクセリオンを構えなのはは魔法陣を展開する

「スターフォースバスター」

なのはの撃った魔力砲は真っ直ぐスウエンに当たり、スウエンの中

から何かが出てスウェンは倒れる

「スウェン君!!」

なのははスターフォースを元に戻しスウェンのほうへ行く

「俺は…生きてるのか?」

「当たり前だよ」

「また迷惑かけたようだな…」

「そんなこと全然ないよ。よかった無事で…」

なのははスウェンへ抱きつく

「本当は君と離れるのが怖かったんだ。そのまま私の知らない場所へ行ってしまいそうで」

「もう俺はどこにも行かない。皆でそばで俺の大切なものを守るために戦うだから預けていたものを返してくれるか?」

「うん」

なのははポケットからクライスブレイカーを出しスウェンに返す

「この戦いが終わったらまた暮らせるよね」

「ああ必ずなその時は…」

スウェンは言い止め空を見る

「いやこの戦いに勝ったときに言うさでも今は…」

「ちよつとスウェン君皆見てるよ」

スウェンは力を使い果たしたのかなのはによりかかり眠ってしまう

「スウェン君起きてよ」

「なのは…久しぶりなんだし二人で過ごしたらヴィヴィオは預かっておくから」

「それじゃあたしが運んでやるよ」

ヴィータはスウェンを背負いなのはの家へと急ぐ

「テストロッサ、ロイトは私が責任を持って主の元に連れて行く」

「それじゃ、はやてによろしくね」

「ああ、また1週間後会おう」

「それまでは一応の休暇ってことでいいのかな」

フェイトが聞くとシグナムは頷きロイトを連れ消える

「それじゃ、ヴィヴィオ行こうか。なのはとスウエンの邪魔した悪
いからね」

「スウエンパパとお話したかった」

「平気だよ。スウエンとは会える時間を設けるからね」

「うん。ありがとうフェイトママ」

ヴィヴィオは上機嫌でフェイトと一緒に帰った

第18話二人だけの時間

「それじゃあな」

「うんありがとうね、ヴィータちゃん」

スウェンを受け取りなのはヴィータにお礼を言う

「なんか久しぶりな気がする。スウェン君と二人きりって」

なのはは電気を付けあたりを見渡す

「なにも変わってないよね…」

ホツとしながら一つの写真を見る

「この時から私の想いは変わらずにスウェン君に向いていたんだっ
たよね」

なのはは写真を戻しご飯を作る

「うゝんここは…」

「あつ起きたんだ」

スウェンは今まであつた事を思い出す

「なんで俺はここにいるんだ？」

「フェイトちゃんが久しぶりなんだから2人で過ごして言いよって
行つたから…もしかして迷惑だった？」

「いやそうじゃないが何と云うかその…」

「もしかして久しぶりに会つたから照れてるの？」

なのはに言われスウェンは顔を赤くする

「それに行つた世界では有名人だったらしいね」

「なんで知ってるんだ？」

「はやてちゃんからの手紙やユーノ君からの手紙。後はスバルやレ

ツカからの手紙かな？」

「俺、どれだけの仲間に見られてたんだよ…」

スウェンは落ち込む

「スウェン君落ち込むよりご飯食べてくれるかな？」

「えっ…なのはが作つたのか？」

「私だつて作れるよ」

「いやそうじゃなくて俺の為に作ってくれたのか」
「なのは顔が赤くなる」

「いいから食べてみてよ」

「ああ、わかった」

茶碗を持ちスウエンはご飯を食べて行く

「おいしいな」

「ならよかったそれでさお願いがあるんだ」

「何だよ…」

「今から一緒に行つて欲しい場所があるんだ」

スウエンは頷きご飯を食べて行く

「外で少し待つててくれる？」

「わかった」

スウエンは外へ出る

「星が綺麗だな…」

「本当だね」

準備のできたなのは来る

「ずいぶんと早いな」

「それより急ごうよ」

なのはに言われスウエンは歩く

「そうだ他の世界回つてどうだった？」

「どうつて言われても戦争が続いてる世界やただ一人の人間が治める世界など色々な世界があつたな」

「そうなんだ」

「でも俺はミッドチルダが一番好きだな」

スウエンが言うとなのはは抱きつく

「それつて私達が好きつてことそれともこの世界が好きつてこと？」

「どっちもかな俺はこの世界で生まれた訳じゃないけど、俺はもうこの世界が故郷だからな」

「私にとつては色々な事があつた世界だし、ユーノ君やフェイトち

やんに会わなければ来れなかった世界だったし」

「それもそうか俺もこの世界に来たのは偶然だしな」
スウェンが言うとなのはは笑顔を見せる

「あっあそこだよ」

「そうかじゃあ行くか…」

「うん!!」

二人は手を繋ぎ向かう

第19話敵の正体

「主、ただいま戻りました」

「お疲れや〜シグナム」

「何かずいぶんと凄いところですね」

「君がロイトくんか、私はな〜八神はやてやよろしゅうな〜」

ロイトは手を握り自己紹介をする

「あつ僕はロイトです。よろしくお願いします」

「何や結構かわええな。それでシグナム、ヴィータはどないしたん？」

「そろそろ帰ってくると思いますけど…」

シグナムが言うところとコウと話しながらヴィータが来る

「はやて〜スウェンは今なのはと一緒にいるよ」

「そうかみんなありがとうな〜」

はやてはヴィータの頭を撫でる

「それでコウ君、何かわかったんか？」

「それよりスバルとレッカ見なかったか？」

「いや私らの方には来てないで」

「そのスバルさんとレッカさんと言う人はどんな人ですか。こんな人たちですか」

ロイトは指をさすそこにはスバルとレッカがいた

「二人ともなんでそんなところにおるん？」

「いやあ〜ロイトくんを見たくて来たんですけど、どこにいるんですか？」

「あの僕がそのロイトです」

「あれ聞いていたよりかわいいですね」

スバルはロイトを抱く

「あのすいません。離してください」

「照れちゃってかわいい。そうだキミ私と結婚しない？」

「ちょっいきなりやな」

「ねえどう…」

スバルは聞くがロイトは気絶していた

「主、テストロッサから預かってきたものです」

「なんやこれ？」

はやてが読むとスバルからロイトを取り上げる

「こういう大事なものは最初に渡してゝな」

「ハッと言いますと？」

「つまりやこの子は女性恐怖症なんや」

そこにいる全員がびつくりする

「実際にいるんですね」

「実は私もびつくりしてるんや」

「でもおかしいですよ。彼はシグナムさんと一緒に来たんですよ」

「それもそうやな」

はやて達はシグナムを見る

「どうしたのですか。主はやて？」

「なあゝシグナムおかしいとは思わんか」

「なにがです？」

「実はこのロイトくんシグナムの事が好きなんやないかと思ってな」
再び全員驚く

「えっ…それはないと思いますけど」

「まっ、あり得ねえ事じゃねえな」

「そうなんか!!」

「まあ実際シグナムは人気だし結構結婚したいという奴もいるんだぜ」

ヴィータは何かの本を出す

「何やその本？」

「時空管理局の事が何でもわかる本だ」

ヴィータが読むとみんな感心する

「凄い人気なんやなシグナム」

「ですが私よりテストロッサのほうが人気だと思いますが」

「でも私やなのはちゃんより人気やん」

はやてが言くとロイトは目を覚ます

「すいません寝てしまったみたいです」

「別に気にしないでそれじゃ君の目的とかから聞いてごうか」

はやてに全てを話しロイトは部屋へ案内され眠りにつく

第20話新部隊結成

辺境の地ザンガイウス

「ずいぶんと遅かったな。ゼロ、セン」

「済まないリードがやられた」

「あいつが死のうと計画に支障はありはしない」

「ザンゼス様、復活の準備は整っているのか？」

ゼロが聞くと男は笑う

「後は星を守りし者二人の血だ。それさえあればザンゼス様は目覚める」

「ならいよいよあの世界を滅ぼすのね」

「滅ぼしはしないだがあの世界が戦場になるのは決まりだな」

「ゾイクでは、俺とセンは先に行く」

ゼロとセンはミッドチルダへと向かう

「センが死のうと平気だが問題はゼロだな」

ゾイクは悩んだ末にある男を呼ぶ

「どうした貴様が我を呼ぶとは」

「ダン、ゼロから目を離すな。不審な行動を取れば殺してかまわない」

「了解だ。ククク…」

ダンもミッドチルダへと向かう

「これで我らが王の復活の時も近い！？」

ゾイクは突然後ろから刺され倒れる

「貴様、何をする」

「いい加減に貴様みたいな下級な奴の下で働くのは疲れたんだよ」

「誰のおかげで今の地位が手に入れたと思っている！！」

ゾイクは剣を出し突き刺すが血が出るだけで相手は痛みを感じない

「それが精一杯か？」

「貴様、いつの間にそんな力を」

「さあな、だがお前の出番は終わりだ。じゃあな…」

「ぐおおおおおおゼクス貴様あああああ」

ゼクスより流れ出た血によりゾイクは消える

「こつちにも時間がないんだ。それにザンゼスあんたにも永遠の眠りについてもらう」

ゼクスはザンゼスの石像を消しミッドチルダへと向かう

「はやてちゃんから指示された場所はここだよね」

「地図上だとそう言う事になるな!？」

いきなり床が抜け二人は落ちる

「ごめんなゝ二人とも平気か？」

「いきなり下に落とされて平気な奴がいるのか？」

「そうだよゝ死ぬかと思っただよ」

「それでここはどこなんだ？」

スウェンが聞くとはやては説明する

「元々は何かの研究室みたいやったんやけど、今は私らの部隊の為に利用させてもらってるんや」

「そうなのか…」

「確かに機動六課の隊舎より広いもんね」

なのはが話すとセイ、ライ、ヤミが来る

「久しぶりですねマスター」

「本当に久しぶりだな」

「またあなた達と戦うとはなククク」

「みんなも元気だった。それにしても全然変わってないね」

なのはが言うつとヴィヴィオ、フェイト、スカルエッティが来る

「なのはママゝ、スウェンパパゝ」

「ヴィヴィオ元気にしてた？」

「久しぶりだなヴィヴィオ」

スウェンはヴィヴィオの頭を撫でる

「それでなんであなたがいるんですか？」

「何…私もこの部隊の一員だからだよ」

「えっ~~~~~」

なのはは驚く

「でもいろいろと平気なの、法律とかさ」

「私はこの世界を壊されては困る。だから志願したのだ」

「実際、スカルエツティの頭脳は凄いしな」

「ふんそうなんだ」

なのはは半分、納得した様子でフェイトを見る

「でもなんでフェイトちゃんがスカルエツティと一緒にいるの？」

「私が誰といようなのはには関係ないよ」

フェイトは顔を赤くして否定する

「何か騒がしいですね〜とスウェンさん久しぶりです!!」

「止める、スバル」

スウェンが止めるがスバルはスウェンに抱きつく

「元気だったですか。スウェンさん」

「まあ、一応な。それでレッカはどうした？」

「レッカならあそこにいますよ」

スウェンが指された方を見るとユーノとレッカが喋っていた

「それにしてもスウェンさん2年間、世界回ってどうでした？」

「色々な事がわかったよ。戦争が続く世界や貧しい世界だね」

「スバル〜そろそろ離れてくれるかな？」

なのははスバルを掴み言う

「離れますけど最後に一つロイトが話しがあるらしいです」

「そうかありがとうな」

「はいそれじゃまた後で」

スバルは走って行く

「スカルエツティ頼んでおいたもの作ってあるかな？」

「まあ一応、完成はしているが：本当に使うのか？」

「念には念を入れないとな。だが俺も使いたくはない」

「まあそれは君たちの努力次第だろうな」

スカルエツティに言われスウェンはロイトの元へと向かう

「フェイトちゃんとスカルエツティってそういう関係だったんですか？」

「いやそう言う訳ではない。彼女が付きまといっているだけだ」

「そうなんですか…」

なのはフェイトを引き離しスウエンの後を追いかける

「さてどうする…」

「一番手っ取り早くここを戦場にしましょうよ」

「待て、そんな事が許されるとでも思っているのか」

ゼクスが現れセンを止める

「それとダンお前は帰っていいぞ」

「なんでだよそれじゃ…ゾイクの奴に怒られるじゃねえか」

「ゾイクは死んだ、もう平気だ。お前は万が一の為に戻れ」

「ちっわかったよ」

ダンは撤退する

「それでどうやっておびき出すのさ」

「こうすれば被害者を出さずに奴らをおびき出せる」

ゼクスは自分の血を周りに飛ばし人型に形成してく

「これで騒ぎが起これば奴らは出てくる」

「あなたにしてはなかなかの作戦じゃない」

「そんな事はどうでもいい、すぐに奴らは出てくるはずだ。戦闘態

勢整えておけ」

ゼロに言われゼクスとセンは戦闘態勢を整える

第21話戦士の迷い

「ロイト、話は何だ？」

「実はゼロを救って欲しいんです」

「確かに彼は誰かの命令で動いてるかもしれないが、人を殺そうとは考えてないもんな」

「もしかしたらゼロは迷っているのかもしれませんが。星の使命に従うかそれとも抗うか」

ロイトが言うとなのはとフェイトが来る

「スウエン……」

「ちよっ…フェイトちゃん!!」

なのはは止めるがフェイトはスウエンに抱きつく

「何か悪いものでも飲んだのか？」

「さあ、僕にもわかりませんけど…」

「ともかくフェイトちゃん。スウエン君から離れてよ」

なのはは引つ張るがびくともしない

「別にいいじゃんねえ……」

「!!」

フェイトはスウエンの唇にキスをする

「フェイトちゃん…もう加減はできないよ……」

なのははスターフォースを準備する

「待て、なのは。こんな場所で撃つな」

「デイベインバスター!!」

案の定スウエンとフェイトは吹き飛ばされる

「あの…警報、鳴ってますけど…」

「えっ…?」

ロイトに言われ耳を済ませると確かになっていた

「ごめん、二人の事よろしく……」

「えっあのっちよっど…」

ロイトは止めるが猛スピードでダッシュしていく

「僕も呼ばれてるのに…」

ロイトは仕方なくスウェンとフェイトを助けに行く

「それじゃ今の状況を説明する。現在ミッドチルダ内に4人のAランク魔導師を確認している。だがまだ隠れてる危険もあるので、二人一緒に行動してもらう。Aチームはシグナム、フェイトBチームはセイ、ライCチームはヴィータ、なのはDチームはスバル、レツカその他の者は待機だ」

「済まないがテストロッサが見当たらない」

シグナムが言うとはやてはコウをシグナムに出す

「それじゃコウ君とシグナム頑張ってるな」

「わかった、それじゃ各自にデバイスに目標地点を入力する。全員無事に帰るように」

「了解!!」

全員頷き目標地点へと向かうその頃二人を救出に行ったロイト

「それにしても凄いな…一瞬で壁を壊すなんて、でもやりすぎだと思っるのは間違いかな？」

瓦礫を退かしながらロイトは先へと進んでいく

「ようやく見つけた平気ですか」

「ロイト…フェイトを止めてくれ」

「えっ…でもどうやって止めれば…」

フェイトは真・ソニックフォームになりスウェンに抱きついていて「頼む…助けてくれ」

「そう言うわれても僕に女性を引っ張れというのはですか？」

「いやそう言う訳じゃないが…なんかだんだんと体の感覚が…」
フェイトは少しずつフェイトに電気を送っていた

「このままじゃいずれ動けなくなるといかなんか、バインドかけられてる気がするけど、気のせいかな？」

「さあ…僕にはまだよくわからないので…」

ロイトはスウェンを助けようか迷っていたその頃

「デモンスピーアー!!」

コウがジークフリートを刺すと赤い液体となり消える

「これで終わりか。どうだ、シグナム…」

「この辺りにはもう反応はありません」

「そうかなら!？」

コウは殺気を感じ回避する

「これを避けるとはあなたなかなか強いわね」

「お前の殺気はわかりやすかったしな」

コウがセンを見るとセンは笑う

「あなたも中々いい男ね私に勝てれば目的を話してあげるわ。でも負ければあなたは私の物どう受ける？」

「そんな事…うつ…」

コウは突然苦しみだす

「驚いたわ、あなた私達の仲間だったのね」

「違う断じて…違う!!」

「否定はしてもザンゼス様の呪いは現れてるわよ」

「!!!!!!」

確かにコウの額に何かの紋章が浮かび上がる

「あなたは私達と同類なのよ」

「止める…俺はグオオオオオオオ」

「コウ…クツ…」

シグナムはセンに斬りかかるが防がれる

「リードぐらいなら勝てたかもしれないけど私には勝てはしない」

「クツ…力負けしてるのか。この私が」

「あの弱いユニゾンデバイスに助けを求めれば」

「アギトの力無くしても貴様は斬る!!」

シグナムは再度斬りかかるが防がれる

「伝説のデバイスの内の一つイフリートを持っていてもこの程度とはね。所詮は闇の書の守護騎士か…」

「何故奴に攻撃が通らないこうしてる間にも、コウは…」

シグナムがコウのほうを見ると邪惡なオーラが包みこむ

「止めるおおおお」

「そろそろね…」

センはコウに近づき唇にキスをする

「これであなたは私の物ククク…」

「させん!!」

シグナムは隙について斬りかかるが止められる

「あなたに興味はないの…もう死んで!!」

「クツ…これまでか」

至近距離で魔力弾を食らいシグナムは吹き飛びレヴァンティンは碎け散る

「それじゃあね。私は彼を手に入れられたから帰るわ行くよレヴァン」

「了解だセン」

コウならぬレヴァンはセンについて行く

第22話休戦

その後、シグナムはスバルに助けられ帰ってくる

「そうか。コウ君は敵になつたんか…」

「主、すいません。私の力が及ばず」

「シグナムが悪いんやない。行かせた、私が悪いんや」

はやては涙を流し言う

「それではやてさん。こんなものを受け取ったんです」

「なんやこれ？」

「何かのデータみたいですけどね」

「一応、調べてみるか」

はやてはパソコンに入れデータを見る

「私の名はゼクス。今回は休戦をしたいと思い連絡させてもらった、明日明朝星降る世界で待つ君達が来てくれるのを楽しみしている」
それでデータは終わっていた

「今の私らには極端に情報が少なすぎる。できれば行きたいんやけどもう星降る世界の道は閉ざされたしな」

はやてが困っていると言ふスバルが言う

「スウェンさんなら行けるんじゃないですか？」

「いや無理やろ。レイジングハートとバルディッシュという鍵はあるんやけど肝心の聖剣士の力がないからな」

「それなら一応は応用できるよ」

ユーノが来る

「なのはの新しいデバイススターフォースそれにイフリートそしてクライスブレイカーを使えば一応は開ける」

「それ本当か」

「信用して平気だよ。それに星降る世界に行けばスウェンに聖剣士の力を戻すことも可能かもしれないしね」

ユーノが言うとはやてはなのはを呼ぶ

「なのはちゃん至急皆を集めてくるんや」

「わかったよ」

なのはは訳も分からないまま全員を呼びに行くその頃

「ゼクスを知らないか？」

「知る訳ないでしょ。ゼロ、あなたもう少し危機感を感じなさいよ」

「お前に俺が負けるとでも思ってるのか？」

「わからないわよ。こっちは二人ががりなんだしねえ……レヴァン」

センはレヴァンの頬を触り言う

「仲間同士で殺しあっても意味はない。俺はただ敵を斬るだけだ」

「そうか……中々いい性格の魔導師だな」

「もう出て行ってくれない」

「邪魔したな……」

ゼロはゼクスを探す

「ようやく見つけたぞ、ゼクス」

「何の用だゼロ」

「お前が俺に手紙を出したんだろう」

「そうだったな」

ゼクスは自分の血でイスを作り座る

「それで話は何だ」

「ゼロ、私と一緒に彼らに協力しないか？」

「確かに俺は義理立てするつもりもないザンゼスにな、星の使命を果たすならそっちの方が圧倒的に効率もいいだがどうやって奴らと接触する気だ？」

「我々しか持たない鍵。そして彼らと接触できる場所星降る世界……エンドワールドだ」

「だが奴らに協力するとしてお前は使命を果たす気はあるのか？」

「ゼロ、何故そこまで使命を果たそうとする親友と別れてまで」

「それが今の俺だからだ、使命を果たす為なら誰を殺してもいい例えお前でもな」

ゼロは刀を向け言う

「だが使命を果たすならそっちの方が効率はよさそうだ。いざとなれば聖剣士もいるしな」

「では決まりだな」

「お前の策に乗ってやる。使命を果たす為に…」

ゼロは出て行くその頃ミッドチルダ機動六課基地

「あつ…なのはさんよかった」

「ロイト君、スウェン君達は？」

「あそこです…」

「止めてくれ…そろそろ」

声が聞こえた方を見るとフェイトはスウェンに抱きつきながらキスをしていく。その光景を見ていたなのははスターフォースを構え窪みにレイジングハートを入れる

「二人とも少し頭冷やそうか！！」

「ちよつと待て、俺までか？」

「当たり前だよねえ、スウェン君？」

「あの…少し加減した方が…」

ロイトが言うとなのははにっこりと笑い二人に向けて魔力砲を放つ
「スターライトブレイカー……」

壁をどんどん貫通し、二人は抵抗もできず吹き飛ばされる

「二人とも反省したかな？」

なのはが様子を見に行くとフェイトは正気に戻っていた

「あれ…なのはそれにスウェン？」

「やつと正気に戻ったんだ。じゃあ吐いてもらおうかな、なんでスウェン君にキスをしたの？」

「えっ…スウェンにキス何の事？」

フェイトは身に覚えがないため言うとなのははスターフォースを再び向ける

「もう少し頭冷やそうかねえ、フェイトちゃん？」

「ちよつと待って。なのは本当に覚えてない」

「そんな嘘が通用するとも思ってるの、もうちょっとまじな嘘をつくんだね」

「なのはさんはやてさんが呼んでますよっと…危ない」
スバルは言いかけ止める

「あの何がどうなっているんですか？」

「ああ、平気だよ。別に関わらなければ被害はないから」
「スバル、ちょっとこっち来てくれる？」

「えっ…なんでですか？」

スバルは危機感を感じながらなのはの傍へと来る

「スウエン君をフェイトちゃんの傍から離してくれる？」

「了解しました!!」

スバルは素早くスウエンを救出する

「それじゃ準備はいいね。フェイトちゃん？」

「なのは本当に覚えがないんだけど…」

「やっぱり二段階にしよう」

なのはは笑いデイバインバスターを放った後スターライトブレイカーを放ちフェイトを吹き飛ばす

「何かすつきりしないな」
「ついでだからスウエン君、スバル。頭冷やそうか!!」

「なんでそうなるんですか……」

「諦めろ、あのなのはは止められない」

「そんな殺生な……」

二人も飛ばされようやくなのははもとのなのはに戻る

「さあ行こう」

「はっ…はい!!」

ロイトは悲惨な状況を見ながらその場を後にする

第23話全てを失い取り戻す力

あれから1日後

「私はゼクス・ロード、今日からこの部隊に配属になる。よろしく頼む」

「俺はゼロ・クラン、馴れ合いをする気はない。ただ自分の使命を果たす為だ」

二人は自己紹介を終えると、ゼロは出て行く

「あれゼロ君はどないしたん？」

「彼なら平気だ。何か困りものかい？」

「コウ君がどうしてるのかなと思ってな」

「コウとはセンが連れてきた青年の事か」

ゼクスが言っているとフェイト、スウエン、なのはが来る

「そう言えば聞きたいんだがなんであんたは俺たちの仲間になったんだ？」

「私の居場所はあるそこにはないそれに君達に興味があるからだ」

「なるほどだが裏切り者なんだろ。向こうにとっては？」

「そうなるだろうな、だが私はもともと彼らとは仲間や友達とは思っていない」

ゼクスが言っているとゼクスはスウエンを見る

「なるほど君が聖剣士か」

「なぜわかる？」

「私は過去に一度戦った事があるからな。だが完全には目覚めていないようだな」

「あんたわかるか聖剣士を目覚めさせる方法」

ゼクスは下を向く

「ない事もないが大切なものと引き換えだぞ」

「大切なものと引き換え……」

「記憶を全て失うんだ」

「！！」

スウエンならぬ全員が驚く

「それって… 私達の事を忘れるってこと？」

「そう言う事になるな」

「だが他人との絆など所詮は邪魔になるだけだ」

ゼロが降りてくる

「俺は自分の使命の為に必要のない絆など消した」

「そんなことないよ。思い出は大切なものだって」

「普通に暮らすなら必要かもな、だが俺たちがやっているのは戦いだ。戦いに私情など邪魔なだけなんだよ」

「でも思いが力になるんでしょ。クライスソウルは」

「だったら思い出は必要なんじゃないかな？」

二人は言うがゼクスは何も言わない

「さあ、どうする君が選ぶんだ」

「俺は… 誰かを傷つける力じゃなく、大切なものを守る力が欲しい。記憶を無くしてもいい、俺は誰もが幸せで暮らせる世界を作れる力が欲しい！！」

「やはりか…」

ゼクスは帽子で顔を隠す

「それが君の信じる事か？」

「そうだな…」

「ふっ… やはり私のかけは正しかったようだな」

「早く渡してやれよ」

ゼロに言われゼクスはある宝石をスウエンに託す

「君の決意、確かに見せてもらった。これはある女性から君に渡すように言われていたものだ」

「もしかして俺を試したんですか？」

「過ぎた事を悔やむな、この宝石の力を完全に引き出せば君の中に眠る真の力もおのずと蘇る」

「後は修行あるのみか…」

スウェンが言うのとゼロは刀を向ける

「聖剣士の力呼び戻すなら一番手っ取り早いのは実戦だよな」

「ちよつと待っていていきなりか？」

「戦争にルールなんてありはしないやるかやられるかそのどちらかだ」

「ついでに言っておく彼は闘争本能の塊だ気を付けるように…」

ゼクスは笑いながら忠告する

「さあ始めるか…」

「ここで始める気かよ…」

「戦争にルールなどありはしない！！」

ゼロはスウェンの言葉を聞かずに斬りかかるがヴィータに止められる

「これ以上この基地壊すんじゃないやねえよ！！」

「何だこいつ…」

「直す身にもなってみろ。この基地大変なんだぞ！！」

ヴィータはゼロを掴みはやての元へと連行するその光景を見て皆は笑っていた

第24話未来の彼女との約束

ゼクスとスウエンは模擬戦をしていた

「うわああああ」

赤いどろどろの化け物がスウエンへと襲いかかる

「何か凄いな」ゼクスさんの技」

「血を操るなんてなんか凄いよね」

「その程度か？」

「誰が…」

スウエンは赤いどろどろの化け物を飛び越え越しに魔法で撃つ

「どうだ…」

「まだ甘いぞ、最後まで油断はするんじゃない!!」

「何だよそれ…」

ゼクスの腕に先ほど倒した血の化け物が付き剣へと変わる

「踏み込みが甘いぞ」

「クツ…強い…」

スウエンは何とか押し返そうと頭の中で作戦を練るがことごとく看破される

「駄目だ、勝てる気がしない…」

「どうしたこの程度か、ならば止めと行くぞ」

「何だ俺の周りに血が集まってる…」

「終わりか…」

ゼロが言った次の瞬間、血がスウエンを包む飛び散る。そしてそこにスウエンの姿はなかった

「そんな…なんで殺す必要があるの？」

「私は殺してはいない。ただ彼に、きっかけを与えたただけだ」

「返してよ、スウエン君を…」

「後は彼自身の問題だ。私が出る幕ではない」

ゼクスは部屋を出て行く

「ハアハア…なんだここ息が詰まる…」

スウエンはただ少しだけ差し込む光を頼りに、歩き続けるとなのはがいた

「なのは…」

「お帰りスウエン君、ご飯できてるよ。それとも先にお風呂にする？」

「なんでいきなり家の中に…」

スウエンが周りを見るとみられたものが結構あった

「それでどうするの？」

「それじゃまずご飯から食べるよ」

「はいどうぞ」

なのはに渡されスウエンはご飯を食べて行く

「スウエン君、今日はどうだった？」

「何がだ？」

スウエンが聞くとなのはは涙を流しながらスウエンへと抱きつく

「私は君をもう二度と失いたくない」

「だが…俺は…」

スウエンの脳裏を皆で過ごした日々がよぎる

「行かなくちゃ…皆が待つてる」

「どうしてそこまで自ら危険の中に入って行くの？」

「それが僕にできる最低限の事だし何より失いたくないから」

「その決意は変わらないの？」

スウエンは頷く

「なら私も君を信じる聖剣士の能力を今一度彼に…」

「なのは…」

「君の信じる未来には、私もいるよね」

「必ずいるよ…」

スウエンが言うとなのははキスをする

「それじゃ待つてる。君の望んだ未来で、だから必ず戻ってきてね」

「うん、約束するよ。僕は必ずみんなで過ごす、未来を手に入れる」

「大好きだよ…」

なのはに言われスウエンは顔を赤くしながら皆の待つ現実世界へと戻る

「そろそろか…」

ゼクスが戻ってくると結晶と化した場所からスウエンが出てくる

「スウエン君！！」

「ちよつと…なのは」

スウエンは突然の事に驚くが何とか支える

「生きててくれたんだね」

「未来の君と約束したんだ。必ず平和な世界を手に入れると…」

「未来の私って？」

なのはが聞くとゼクスはスウエンの前に来る

「ならば彼女に会えたんだな」

「なんとかねそれに聖剣士の力も戻ったし」

「これで準備は整ったか…後は…」

ゼクスは空を見る空は赤く光時々雷が起きる

「彼らを休ませなくては…さっそくで悪いが力を貸してもらおうぞ」

「わかりました…」

「いよいよあいつらとも決別か、ゼクス」

「我々の目的の障害となるものは、全て排除させてもらおう！！」

ゼクスは何かの塊を空に向け投げると3人の黒い影が現れる

第25話集結するメンバー

「あれって…私にフエイトちゃんそれにはやてちゃん？」

「なるほど、彼女達をコピーして来たか」

「だがなんだろうと邪魔をするなら切り捨てるのみだろ？」

「その通りだな。行くぞ…」

ゼクスは挑むが、はやてらしき影に止められる

「だらしないぞ、ゼクス!？」

ゼロが動くよりもフエイトらしき影はやく動きのど元に何やら雷を帯びた小刀を向ける

「一歩でも動けば、あなたは死ぬ」

「クッ…なんだこいつ殺気は感じないのに、凄い威圧感だ」

ゼロもゼクスも一歩も動けずいた

「どうすれば…」

スウエンが迷つてると目の前になのはらしき影が来る

「戦いはただ人の悲しみや怒り、負の感情を増大させるだけだよ」

「でも僕は…」

スウエンが下を向くとなのはらしき影はスウエンを掴み笑う

「ようやく捕まえた。もう逃がさないよ」

「駄目だ、力が出せない」

スウエンは振りほどこうとするが無理に振りほどこうとすれば腕がちぎれる危険があった

「この程度か…」

「あれはコウ君…!」

「はやてちゃん危険だよ…!」

なのはは止めるがはやてはレヴァンへと向かう

「わかるか、コウ君。私や、はやてや」

「俺の名はレヴァンだ。コウは死んだ、貴様も死ぬ」

「!!!!!!」

はやては驚くがレヴァンの撃った魔力砲ははやてに届かず目の前に見覚えのある羽が現れる

「ご無事ですか。主、はやて」

「はやてちゃん、平気ですか」

「リインにまさか…リインフォースか？」

「そうです。でも私達だけではありません、ここに来たのは」

その後、向こうで悲鳴が聞こえる

「平気ですか。兄さん」

「エリオ…今までどこに？」

「今は僕の事より、ダークNを止めないと」

エリオはストラーダを持ち言う

「それに僕だけではありません。ティアナさんやキャロそれにギンガさん、ヴァイスさんも来てます」

「そうなんだ…」

「兄さんなんかオーラは弱くなったけど、潜在能力は上がったようですね」

「そんなこともわかるの？」

エリオは頷きストラーダを強く持つ

「兄さん行きますよ。あの程度でくたばる筈がありませんからね」

「それじゃ…行くか」

スウェンの目の色が赤色に変わり手にはクライスソウルが握られる
「ずいぶんと遅い到着だな…ティアナ」

「それでも飛ばしてきたんですよ。それに絶体絶命のピンチだったじゃないですか」

「うっ…少し油断したただけだ」

「あれ…いつも油断するなって言っていたのは誰でしたっけ」

ティアナが言うとダークFはがれきの下から現れる

「少し油断したけどまだやれる！？」

ダークFは突然飛んできた魔力弾を避け目の前に迫る拳を避けるが背中に痛みを感じる

「そんな…こんな場所で終わりだななんて…」

「すいません、フェイトさんでも眠ってください」

ダークFは光になり消える

「クツ…このままでは私の敗北か」

「こんなもんか？」

「だが私に敗北はない！！」

ゼクスは再び斬りかかるが止められるというか弾かれ建物へと激突する

「クツまだだ、まだ私は…！？」

ゼクスが瓦礫から出ると目の前に灰色の魔力砲が迫ってくる

「ここまでか…」

「クククさらばだ、裏切り者！！」

ダークHは笑いゼクスを見るがゼクスの前に何かがいたのに気づく

「守護の務め今度こそ果たす！！」

「さすがね、ザフィーラ」

シャマルとザフィーラが現れる

「何故、私を…」

「はやてちゃんが認めたなら私達の仲間だもの、命がけで守るのは当たり前的事」

「それが盾の守護獣としての務めだ」

「私を裏切るか！？」

ダークHは危険を察知し後ろへと下がるとヴィータがアイゼンで殴りかかる

「ちっ…外したか」

「そのようなものにやられる私ではない…うぐっ！？」

「隙だらけだったのな、斬らせてもらった」

「貴様あああああ」

ダークHはシグナムのほうを見るとヴィータにおもいきり殴られる

「はやての恰好でこれ以上悪さすんじゃないよ！！」

「グオオオオオオ血が…まさか貴様…」

「最期ぐらいは丁重に送ってやる!!」

「止めるおおおお」

ゼクスゼクスの技によりダークHはあとかたもなく飛び散る

「済まない私一人では負けていた」

「まあ悪い気はしないけどな、でもその怪我そんなに強かったのか？」

「そう言う訳ではない私が自分の力を使うには自分の血を流さなければならぬ」

「つまりそれは自分で傷つけた物そう言う事だな」

ヴィータヴィータに言われゼクスは頷く

「さてそれじゃあたし達ははやてを助けに行くか」

「そうだな、スウエンのほうは平気だろう」

「急ごうリインフォースだけでは押されてる筈だ」

「それならば私も行こう」

5人ははやての元へと向かう

第26話全ての黒幕

「うおおおお」

「はああああ」

エリオとスウェンはダークNへ反撃の暇も与えずどんどん斬撃を加えて行くがダークNは血を流しながらも隙を探す

「見つけました!!」

ダークNが手を伸ばすとスウェンを掴む

「兄さん!!」

「クッ…なんだこれ離せない？」

「もう離さないよ。これだけ傷つけられたんだもの」

「兄さんを離せええええ!!」

エリオは斬りかかるがダークNはスウェンを盾にする

「なんて卑怯な…なのはさんなら…きつとやらないと思う…」

「エリオだんだんと声が小さくなってるぞ…」

「さてどうする。私を斬れば彼に当たる私は別にいいけどね…男の人に斬られるのって何か興奮するのよね…」

「兄さん彼女は変態なんですか？」

スウェンは頷く

「君もよく見るとかわいいね…私の恋人になってみない？」

「いい加減にしろ、センその首切り落とすぞ!!」

後ろにいきなりゼロが現れる

「何をしに来たの？裏切り者」

「そろそろお前の存在は目障りだ。消えてくれるか？」

「私を斬る前に後ろに注意した方がいいよ」

「なに!？」

ゼロは後ろに殺気を感じ動けない

「私を殺したとも思いましたか？」

「我らは何でも蘇るコアが存在する限りな」

「ずいぶんと面倒くさいものを用意したんだなセン」

「それが彼からの命令でしたしね」

センが言くと魔力砲が飛んでくる

「クツ…油断した」

右腕を押さえセンが魔力砲の飛んできた方向を見るとなのはにフェイト、スバル、ロイトがいた

「もう止めてくれない、リル」

「私はもうあなたの知る私ではないの、だから気安く呼ばないで！」

「この香りは僕の知ってるリルだよ」

「！！！！！！」

ロイトはセンにキスをする

「貴様ああああああ」

「グツ…」

ロイトは右肩を押さえながらセンを見る

「なにが君を変えたの？」

「あなたには関係ない。ましてや裏切り者なんかに！！」

「確かに僕は君たちを裏切った、でもそのおかげで君の大切さがわかったんだリル…」

「その名で呼ぶなあああああああああ」

センは攻撃を仕掛けるが当たらない

「何故だ、何故、涙が止まらない私は…うおおおお」

無理に自我を引っ込めようとする

「リルもついいんだ僕は…」

「私に触れるなあああああああ」

センはロイトを吹き飛ばす

「ハアハア…これ以上寄るな！！」

センは頭を押さえ言う

「後一步だよ頑張って…ロイトくん！！」

「僕は…君に何をしてあげられるか分からないでもこの気持ちだけ

は本当なんだ僕はリルと一緒に生きたい!!」

「!!!!!!」

センは魂が抜けたように倒れる

「リル!!」

ロイトが支えるとセンは目を開ける

「ありがとうねロイト」

「リル…僕の事がわかるの?」

「当たり前だよ。私が世界中のだれよりも大好きな人だもの」

「リル…よかった」

ロイトがなくなると皆も涙を流す

「感動の再会だね」

「うん、彼は彼女を助けるために今まで戦い続けたんだね」

「ついでに言っておく俺やリードそれにゼクスもあいつの仲間だ」

「それじゃ彼はただ一人で仲間と戦ってたの?」

ゼロは頷く

「でもよかったですね~~~~」

「スバル、あんた涙を流すか、鼻水出すかどっちかにしなさい」

「これでいいのかな?」

「恋人同士ならいいんじゃないかな」

なのははスウエンによりかかり言う

「なるほどこれが俺が忘れていた力か…」

「大切な人を守る時には人は無限の力を出せるんだよ」

「想い…俺の心の中にもあるのか…この感じなんで奴が」

「何だこの禍々しい感じ二人が危ない!!」

スウエンとゼロはロイトとリルの元へと向かう

「逃げる二人とも!!」

「えっ…?」

「いいからそこから動くな」

スウエンは転移魔法を発動し二人を転移させると何者かが降りてくる

「クッ…なんて気迫だ」

「まさかこれほどとはな…ゼノン!!」

ゼロが言つと腕が出てきて二人を捕まえる

「スウエン君!!」

「クッ…駄目だ振りほどけない」

二人は脱出しようとするが振りほどけずだんだんと強く握られる

「ぐわああああああああ」

「ぐううううううううう」

「中々しぶとい奴らだなならばこれでどうだ!？」

突如何かが現れ腕を切断する

「ハアハア…ようやく見つけたぞゼノン!!」

「ゼクスに…レヴァンか」

「いや俺はコウだお前の呪縛はすでに解けたんだ」

「想いの力か…ならば面白い貴様らにとっておきのプレゼントをくれてやる!!」

全員の足元に転移魔法が発動しその場から全員消える

第27話地球…？

ミッドチルダから遙か離れた世界、そこに一人の魔導師が落ちていく

「うわあああああ~~~~」

「なになに？この声、上から…」

女性が上を見るとスウェンが落ちてきた

「すいません…」

「ふにやあ~~~~」

女性は目を回し倒れている

「どうしよう…」

スウェンが色々と見ていると女性は起きる

「あれ〜なんで私こんなところで寝てたんだろう？」

女性は記憶を整理しスウェンを見る

「あ~~~~思い出した。君がいきなり落ちてきてこうなったんだっ
た」

「その節は…すいません」

「いや別に怪我もしてないし問題ないよ。それより君の名前は？」

「あつ僕は高町スウェンです」

スウェンが言うと女性は驚く

「へえ~~~~君も高町って言うんだ、私はなのはよろしくね」

「よろしく願います…」

スウェンが言うとなのははスウェンの頭を撫でる

「そうだ私の友達紹介してあげるよ。ついてきて」

なのはに言われスウェンはついて行く

「ごめんみんな~~~~遅れた~~~~」

「まあいつもの事だから怒りはしないけど…その子誰？」

「えっと空から現れたスウェン君だよ~~~~」

「えっとよろしく願います」

スウェンがお辞儀をすると皆近づいてくる

「私はアリサ・バニングスこっちは月村すずかそんでもってこっちは八神はやてそれで彼女はアリシア・テストロッサよろしくね」

「はい…お願いします」

スウエンが挨拶を終えるとはやてが近づいてくる

「なあ…君って魔法使いなんか？」

「いやそうじゃないよ、ただ空から落とされたただけだし」

「魔法使いならサインでも貰ったところと思ったのにな」

はやてはスウエンの前から去る

「ふう…何かこの世界じゃ僕が魔導師という事は秘密にしておいた方がよさそうだ…」

「どうしたのスウエン君？」

「いや何でもないよ、それより君はどんな仕事してるの？」

「最近是不況だしね、本来のお店よりバイトとかのほうが多いかな？」

なのはが言うところあるお店の前へと来る

「ここは…？」

「今はもういないけど私の大切な人が私と一緒に始めたお店だよ」

「へえ……！！」

スウエンはあたりを見ながら一枚の写真を見ると笑顔で楽しそうに少女と少年がほほ笑んでいる

「その写真は彼と初めて会った時に撮った写真だよ…」

「その彼、名前は僕と同じだよね」

「うんそうだよ、そして私達は結婚したんだ子供も今は2人いる一人はヴィヴィオで一人はユーノだよ」

「そうなんだ…」

スウエンは埃がかぶっている台所を拭き料理を作り始める

「なにやってるの？」

「なのはに元気を出してもらおうと思っただけ」

「あ…」

なのははスウエンを見ると驚く

「スウェン君：私に会いに来てくれたんだね」

「わっ…危ないよ…なのは…」

「てへへへごめん」

「さあ出来たよ、どうぞ…」

スウェンは自分が作ったご飯をなのはに食べさせる

「うん、おいしい〜」

「そうかよかった…」

スウェンは後片付けを終えなのはを見る

「ねえ、君は何しにここへ来たの？」

「なんでだろう。ただ飛ばされてきただけなんだ」

「そうなんだ…」

「でも何かホツとしたよ。僕の知っている人に会えて…」

スウェンが言うとなのはは抱きつく

「どうしたの…なのは？」

「君は君の大切な人を悲しませないでね」

「平気だよそれに…」

スウェンは玄関を見るその後になのはも玄関を見ると死んだはずの

スウェンがいた

「なんで…スウェン君が…」

「悪かったな、待たせて…」

なのはは涙を流しながらスウェンへと向かっていく

「もう…どこにも行かないよね」

「ああ、だからここに來たんだ」

スウェンはスウェンの前へと立つ

「君が別次元の俺か…」

「何か強そうですね…」

「人間の能力に違いはないさ、それより君はまだ戦い続けているんだろ」

「そうですね…」

スウェンが言うとスウェンは何かを託す

「なんですかこれ？」

「俺がなのはと出会うきっかけだ」

「そうだよ。でももう私達には必要ないものなんだ」

「だがまだ君には必要な物の筈だ。遠慮しないで受け取ってくれ」

二人は笑顔でスウエンへと渡す

「でも僕には…」

「君が本当に誰かを守りたいと思えば必ずこの力は必要になる筈だ」

「君にはまだやらなければならぬ事がある筈。だったら君が持つのが一番いいんだよ」

「ありがとうございます」

スウエンが受け取ると次元の壁が開く

「後は君の行きたい場所へそれが導いてくれるさ」

「うん胸張って行きなよ頑張ってね」

「はい、色々ありがとうございます」

「どんな時にもあきらめない心それが一番大切な想いだよ!!」

なのはが言つとスウエンは入って行く

第28話裏切り…そして…

次元の壁を出るとそこには何者かが結晶化されていた

「なのはにフェイトそれから…」

他にもゼロやスバル、エリオなど新部隊のメンバーが結晶の中にいた

「ハアハア…皆を返せ!!」

「弱者は所詮吠えるしか脳はないらしいな」

血を流しながらロイトは言うがゼノンは体内から何かを出しロイトを包み込む

「クッククク残念だったな、貴様も我が奴隷となる為にその命全て我が包んでやるう」

「クツ…僕の花じゃここまでか…」

ロイトは包まれ結晶化する

「済まぬ。私の為にだが必ず、私はあいつを倒す!!」

ゼクスは全身から血を出しナイフを作りだす

「行くぞ…はあああああ」

ナイフは全て一斉にゼノンへと向かうが途中で叩き落される

「そんなものか？ゼクス」

「何故、お前が生きている…ザンゼス!？」

突然痛みが来てゼクスは何とか意識を保つ

「クツ…ゼノンお前さえ消せばまだ私達にも勝ち目がある筈だ」

「無駄な努力というものだ。いいから消えろ!!」

「クツ…まだ私は…」

「悪あがきか…所詮、弱者の考えることなど全て同じ。いいからその命我に捧げろ!!」

ゼクスは苦しみながら結晶化してしまう

「そこに隠れている奴、出てこい!!」

スウェンが出て行くとゼノンは笑う

「貴様が聖剣士か？」

「……………」

スウェンは黙りこむ

「ならば我にその命捧げてくれるか？」

「僕は…」

スウェンの周りを何かが包みこんでいく

「まずいな…貴様はここで息の根を止めてやる…！」

ザンゼスはスウェンへと斬りかかるが何が起きたのかもわからず腕が吹き飛ぶ

「クツ…何だあの障壁…」

「……………」

ゼノンは何もしゃべらずただスウェンを見ている

「ゼノンどうすればいい？」

「我に良い作戦がある。一度、戻ってこい」

ザンゼスが戻ると一人の女性が結晶から出てくる

「お呼びですか…」

「さっそくで悪いがあのを止めてくれるか？」

「わかりました。あなたの期待に答えられるよう全力を尽くします」

「悪いな…」

ゼノンが言々と女性はスウェンへと向かう

「本当に平気なのか？」

「多分戻されるだろうな、だが怪我は負う筈だ。その後で、どうにでもできる彼も彼女もな…」

「なるほど随分と悪くなつたものだな」

「お互い様だろう」

二人が話しているとスウェンを包んでいたオーラがスウェンの中へと入り目の色が変わって行く

「行くよ…クライストライデント」

スウェンは向かってくるのはへと挑む

「あなたには恨みはないけど…あの人からのお願いだから…」

「僕が必ず戻すだから…少しだけ我慢して…」

スウェンはなのはを抱きしめ言う

「スウェン君…でも私は…」

「君がどうなろうと僕は必ず守る。それが僕の信じる心だ!!」
スウェンが言うのと皆を包む結晶もだんだんと溶けて行く

「何だと…どう言う事だ」

「ゼノン、貴様の負けだな…」

「なっ…ザンゼス貴様、裏切る気か…」

「裏切りか…成程、貴様らしい例えだな」

ザンゼスはゼノンを刺し吸収していく

「ククク俺の完全復活の時だ…聖剣士今だけは生かしてやる。だが

貴様らに残された希望は消させてもらう!!」

「まさか…止める罪のない人々を殺す気なのか」

「弱者は消えるそれがこの世界の掟だ。デス・メテオ・インフェル

ノ!!!」

「止めるおおおお」

スウェンは止めようとするが炎はミッドチルダを包み込む

「フッフハハハこれが弱者の末路だ」

「うわああああああ」

「その悲しみは俺の力へと変わるクククもうすぐだもうすぐで俺は
完全な力を手に入れる」

「貴様ああああああ」

スウェンはなのはを置きザンゼスへと向かう

「ふん今貴様に構っている暇はない!!」

ザンゼスはスウェンを受け止め地上に落とす

「返せ…皆の笑顔を…返せ!!!」

「言った筈だ貴様に構っている時間などないと…」

スウェンは殴られ飛ばされる

「聖剣士、星の使い、聖なる8人の戦士」

「何の事だ…」

「俺は待っている君達が俺を倒す事をな…」

ザンゼスは消えミッドチルダの炎も消える

「彼は…一体…何の為に生きているんだ？」

スウェンは悩みながらなのはほうへと向かう

第29話最後のわがまま

その後、スウエン達は海鳴市へと避難していた

「なのは…」

「どうしたのスウエン君？」

「僕のせいで…ミッドチルダは…」

「平気だよ、ミッドチルダは何なら見に行こうか？」

なのはに聞かれスウエンは頷く

「じゃ…目を閉じて」

「うん…」

スウエンが目を閉じなのはに連れてかれると確かにミッドチルダだった

「でもなんで…ザンゼスの攻撃を受けたのに…」

「あれはもう今は使われていない世界だよ。だから実質ミッドチルダへの被害はなしなんだよ」

「そうなんだ…」

スウエンがあたりを見るとなのははスウエンの腕を持つ

「絶対に帰ってくるよね…」

「えっ…何の事？」

「とぼけても無駄だよ。一人で決着をつけに行く気でしょ」

「なのはにはお見通しか…」

スウエンは空を見上げ言う

「それに私だけじゃない、みんなもわかってるよ」

「えっ…!？」

スウエンが後ろを振り向くと皆がいた

「スウエン…これを…」

ユーノはスウエンに向けて何かを投げる

「これは…?」

「君が死にそうな時に使ってみて、きつと力になる筈だから」

「そしてこれは僕からです」

ロイトに渡された宝石は紫の宝石だった

「絶対に帰ってきてください……」

「僕は死に行くんじゃない。彼を……ザンゼスを止めるために向かうんだ……！」

「ミッドチルダは必ず守る。だから気をつけてね」

「うん、それじゃ……行ってくる……！」

スウエンの前に次元の扉が開きスウエンは吸い込まれるように入っていく

「でもなのは、本当にいいの？」

「うん、私は信じてるから彼の事……」

「大丈夫ですよ。スウエンさんなら必ず帰ってきます、だから私達はスウエンさんが帰ってくる場所を守り通さなきゃいけません……！」

スバルが言うとなのは達は次元震を感じる

「ついに始まったのか？」

「なのは……こつちにも敵が来てる、行くよ……！」

「必ず守って見せる。彼が帰ってくる場所を……！」

なのは達は突如現れた謎の敵へと挑む

第30話最終決戦 前編

「みんな…僕は必ず帰る。だからそれまで…!？」

スウエンは突如、来た攻撃を避ける

「何だ…聞いてた話と違うじゃねえか」

「そこをどいてください…」

「小僧がいきがるんじゃないやねええええ」

「ごめん…」

スウエンが謝ると同時に斬り裂かれる

「馬鹿な…俺はグオオオオオ」

「僕もまだ負けられないんだ」

スウエンは先を急ぐ。その頃ミッドチルダ

「クツ…敵の数が多すぎる」

「だが私達は死守しなければならない」

「俺もこの世界を壊されたくはないしな」

「みんなが同じ気持ちなら行ける筈だよ」

なのは達は何人かに分かれミッドチルダ全域を守っていた

「私達は何もしなくていいのですか？」

「私の予言が正しければ聖剣士に力を送る為にあなた達は必要となる筈ですそれに…」

「……………」

カリムが見ると男は飛び立つ

「彼は…」

「あの戦いの後聖剣士が連れてきた騎士ゼスト・グランガイツです」
「なるほど…彼が背負ってきたのは彼だったという訳ですね」

「ザンさんですか？」

シャッハが聞くとカリムはザンへ言う

「あなたの力ならもう一つのこの世界と並行して存在する世界へ行ける筈です」

「それは可能ですが…次元震が多発しますよ」

「いまさら多くなろうと大した問題ではありません。それにこの世界の命運は彼の力に託されているのです」

「ならば私に反論の余地はありませんね。すぐに準備をしますが、少し時間がかかります」

ザンは準備の為に部屋を出て行く

「シャツハ、あなたはこの人をここに連れて来てくれますか？」

「わかりました、それでは…」

シャツハも向かう

「聖剣士それと対をなすものが彼女の筈そうすれば…うつ！？」

カリムは血を吐く

「急いでください…聖剣士の命の灯が消えかけています」

カリムが念話ではやて達に言つと空に映像が写る

「遅かったですか…」

「貴様らの希望は今、潰えた。それがその証拠だ」

「なんてひどい事を…」

「スウエン君！！」

なのは達はザンゼスを睨む

「ククク所詮、聖剣士といえど一人じゃ何の意味もない！？」

ザンゼスの背中に痛みが走る

「僕はまだ死んでない…まだ全てが終わった訳じゃない」

スウエンの姿は、目は片目なく、心臓部分に穴が開き、左腕は肩から下がなくデバイスはもう所々にひびが入った状態だった

「約束したんだ。必ず帰るって…」

「黙れええええええ！！」

「グッ…」

スウエンは抵抗もできずに吹き飛ばされる

「貴様は皆が見ている前で八つ裂きにしてやる！？」

ザンゼスが近づくとスウエンの傷が全て治癒されていくというより人間ではなく悪魔に近づいて行く

「うおおおおおお」

「グウウウ、貴様ごときにやられる我ではない」

スウェンを受け止めザンゼスは腹から腕を出しスウェンの左目を切り裂く

「はああああああ」

「何だ力が上昇している？」

ザンゼスは驚きながら吹き飛ばされる

「いけません。その力に翻弄されては…」

「何だ…この声…」

スウェンの意識の中にカリムの声が響く

「一体何が…」

「私はカリム覚えていますよね」

「カリム…」

「いえ今はそんな事は関係ありません。このままではあなたは心を失くしたただの戦闘兵器となります」

カリムの言葉にスウェンは驚く

「このままではあなたは自分自身の手で大切なものを壊します」

「僕は…まだ死に訳には…行かない！！」

スウェンから再び光が出て姿が変わる

「ついて来てくれますか」

「あれ、シャツハ何しに来たの？」

「私は今回ある人のお願いで高町なのはあなたを迎えに来ました」

「どう言う事？」

なのはが聞くとシャツハは一応自分のわかる範囲の事を言う

「わかったよ。私はついて行くでも私が抜けたら…」

「その点のご心配なく、我々の仲間がいますから」

「俺はゼスト。よろしく頼む」

「こちらこそお願いします」

ゼストは元々なのはがいたポジションへと着く

「これで心配はありません行きますよ」

なのはシャツハに連れられカリムの元へと連れて行かれる

第31話最終決戦 後編

「ここは…」

「私達の世界です。手荒な事をして申し訳ありません」
ザンは謝る

「この世界の危険なんだろ。なら俺たちは協力するさ」

「うん、誰もが幸せに暮らせる世界を実現させるためにね」

「すいません、本来はあなた達の力を借りるなど駄目なのですが…」

「困った時はお互い様さ。それに…」

男性は空を見て言う

「こんな綺麗な世界、壊させたくはない…」

「私も彼と同じ気持ちです」

「それでは私について来てくれますか？」

二人は頷きザンの後について行く

「失礼します…」

「シャツハ、彼女は連れてきましたか？」

「はい、こちらに…」

シャツハはなのはをカリムのほうへ連れて行く

「久しぶりですね…」

「あつ…カリムさん？」

なのはが聞くとカリムは笑いながら手を差し出す

「あなたに会わせたい人がいます」

「会わせたい人？」

なのはが再び聞くとドアが開き一人の女性と二人の男性が入ってくる

「えっと…どちら様ですか？」

「俺は高町スウェン、よろしくな」

「私は高町なのは、よろしく〜」

二人が自己紹介をするとなのはは驚く

「えっ…高町なのは…？同姓同名ですか」

「いや違うよ。君達とは別世界のあなたと言えはわかるかな？」

「つまり、俺たちは本来こちらの世界に干渉してはならないんだ」
スウェンが言うとなのはは頷く

「それでも来たという事はよほど大事な事なんだね」

「まあな、それに俺たちの力がなければ君をあいつの元に送る事は出来ない」

「だから私達が来たんだよ、それとこれを渡す為に…」

なのはは別世界のなのはからレイジングハートに似た宝石を渡される

「それは…天使の心という君達の世界で言えば、ロストロギアだよ」

「なんでそんな危険なものを私に？」

「ロストロギアだからと言って危険と決めつけるのは駄目だよ」

「でも強大な力だからその文明は滅ぶんでしょ…」

なのはが聞くとカリムは一つの紙を出す

「なんですかこれ？」

「彼の出世の秘密です」

「なんでこんなものをあなたが…」

「……………」

カリムは黙りこむなのはは黙って読み紙を落とす

「それが彼の本当の出世です…」

「こんなの嘘だ…」

「嘘じゃありません、もう彼は死んでいるのです」

「でも普通に喋れるし、触れることもできる」

なのはが言つとカリムはさらに詳しい情報を出す

「今の彼は…もうあなたの知る彼ではありません」

「そんな事関係ないよ、私は彼と生きるそう約束したんだ!!」

「あんたの負けだな、カリム…」

スウェンはカリムの肩を叩く

「私に無くて彼女にあるものそれがこの想いという訳ですね」

「そう言う事だな…」

「ならば…手を差し出してください」

「こう…？」

なのはが手を差し出すと手の中に透明な宝石が現れる

「さあ行ってください、聖剣士の想いを受け止める為に…」

「うん、行ってくる」

「私達は願うよ。君達の勝利を」

「必ず二人で戻るんだ」

なのはは見送られスウェンの待つ場所へと向かう

第32話星の断罪者

「ここに…スウェン君が…」

なのははほとんど奥へと進む

「なにもんだおめえ…」

「この奥に一人、魔導師はいませんか？」

「なるほど…おめえが聖剣士の仲間か」

目の前に倒れている、化け物は立つ。なのははそれと同時に戦闘態勢へと入る

「安心しろ俺にもう戦う力は残されてねえ、ただおめえと話がしたいだけだ」

「話ですか…」

なのははスターフォースを降ろし化け物を見る

「済まねえな。俺の名前はアサルト、元々は君達と同じ時空管理局の魔導師だ」

「なんで時空管理局の魔導師が私達と戦ったんですか？」

「元々、俺はある調査とある世界へ行っていたんだ。だがそこで見た物は積み上げられた仲間の死体だった」

それからアサルトは続ける

「俺は何とか逃げた、だが最終的に捕まり、今の俺がいる訳だ」

「そうなんですか…」

「彼を助けに行くんだらう、気をつけろよ。奴にはまだ隠された能力がある筈だからな」

「はいそれじゃお元気でアサルトさん」

なのはは走って先を急ぐ。その頃、魔王の間

「グッ…ハアハア」

「どうした先ほどの気迫、もう一度出してみよ」

スウェンは血を拭きデバイスを強く持つ

「やはりこれが限界か…」

「まだ戦えるさ」

スウエンは立ち上がりデバイスを構える

「わからないな。何故、そこまで他人の為に戦う？」

「僕の事を認めてくれた。仲間だから…僕も自分の力の限りに守る」

「貴様はもう体を維持するのも辛いんじゃないか」

「確かに、でも刺し違えてもあなただけは倒す」

スウエンが言うと赤い刃がスウエンへと刺さる

「グッ…ガハッ」

「痛いかな、苦しいかだが所詮それも貴様にとっては作り物の痛み」

ザンゼスはさらに赤い刃をスウエンに向けて放つ

「ぐわあああああああ」

スウエンの左目に赤い刃が刺さる

「スウエン君！！」

なのはは辿り着きスウエンの元へと向かう

「聖剣士、貴様は絶望の中で死んでもらおう…」

「まさか…止めるおおおザンゼス！！」

ザンゼスはなのはに向けて赤い刃を投げるがなのはに当たらず全て

スウエンへと当たる

「スウエン君…」

「平気…怪我はない？」

「うん、君が守ってくれたから」

「ごめん、でももう約束守れそうにない」

スウエンは倒れる

「馬鹿な無駄死にか。いや最初から死んでいるのだから無駄死にではないか」

ザンゼスは笑いながらなのはを見る

「そんな…まだお別れなんてやだよ」

「もうそいつは目覚めない。全ての生物は還るべき場所へ帰るんだ」

「絶対にまだ生きてる筈！？」

「何だこの光…」

なのはとスウエンを繋ぐように光が出る

「聞こえるか…」

「はい、聞こえます」

「その光を先ほど渡した透明な宝石に近づけるんだ」

なのはが言われたとおりになると宝石が光を取り込んでいく

「目障りな…消えろ!!」

ザンゼスは赤い刃をなのはに向けて放つが何かに弾かれる

「何だ魔導フィールドだと…」

「スウエン君、今行くよ…二人なら絶対に勝てる!!」

なのははの意識はスウエンの中へと入る

「なにが起ころうとしている…」

ザンゼスは警戒しながら周りを見ると星が包んでいた

「何この世界に星など…まさか星魔導…」

ザンゼスは恐れながらスウエンを見ると右目は青、左目は緑。左手

にはスターフォース、右手にはクライスソウルが握られていた

「まだ終わってないよ」

「まさか…貴様ら意識の融合をしたのか」

ザンゼスは驚きながら再び赤い刃を放つが途中でかき消される

「あなたの攻撃は通用しない」

「もう僕らには…」

「ふざけた事をぬかすなああああ」

ザンゼスはミッドチルダを焼き払った最大魔法を放つ

「デス・メテオ・インフェルノ!!」

「スターフォースビッグ・バン!!」

二つの魔法がぶつかり次元が崩壊していく

「なのは、後は僕がやる。だから君は先に帰ってて」

「わかった。絶対に帰ってきてね」

なのはの意識はスウエンの中から消えなのははもとの世界へと戻る

「貴様は何故、残った」

「あなたに聞きたい事があるからだ」

「何だ。もう俺は消えるのも待つ身だ」

「星の断罪者について知っている事、何でもいい教えてくれ」
スウエンが聞くと何者かの気配を察知する

「早く行け。お前が捕まる事はないどうしても知りたければここに行くんだな」

「ザンゼス、あなたは…」

「俺は所詮、魔王になれなかったのさ。それにここから一刻も早く出て行けっ…」

ザンゼスは突如何かを撃たれ倒れる

「あなた達は一体…」

「我々に構わない方がいいですよ。スウエン・レイク」

「あなた方が星の断罪者という訳ですね」

「だとしたらどうするんですか？」

スウエンは黙りこむ

「それにあなたにも断罪するだけの罪があるのです。いやあのミッドチルダと呼ばれる世界こそ全ての元凶なのかもしれない」

「なにが言いたい？」

「つまりこれからのあなた達の行動によっては私達を敵に回すかもしれないという事です」

星の断罪者達はザンゼスを連れて次元の彼方へと消えて行く

「そうです、忘れるところでした。あなたに渡すものがあつたんです」

「これは…まさかあなた達のボスは…」

「それではごきげんよう」

星の断罪者達は消えスウエンは渡された薬を飲みと体が再構築される
「やはりあの人たちのボスは霊守」

スウエンは崩壊する世界を抜けミッドチルダへと戻る

最終話彼を探す旅

あれから1年後ミッドチルダ

「色々ありがとうございました」

「気を付けてね、まだ世界は平和にはなっていないんだから」

「わかりました。また会える時を楽しみにしています」

ロイト、リルは手を振り、自分達の世界へと戻る

「それじゃ…俺たちも行くぞ、ゼクス」

「そうだな。まだこの次元世界には悪意があるしな」

「二人とも、もう行くんですか？」

なのはが聞くと二人は次元の扉を開く

「それじゃあな…縁があつたらまた会おう」

「では…さらばだ!!」

ゼロとゼクスは転移していく

「行っちゃったね…」

「うん、でも彼らは戦い続けるんだよね」

フェイトの言葉になのはは空を見る

「私達もこの次元世界が平和になるよう戦い続けないとね」

「そうだね…」

二人が話してるとはやてが来る

「準備はええか？」

「うん。平気だよ」

「それじゃ、行こうか…」

「向こうでもうみんなも準備してるんや」

はやてに連れられなのはとフェイトも行く

「でも私達が抜けて、時空管理局は平気なの？」

「でも、この任務はクロノ提督が言つて来たんや」

「そうだよ。それに私達と守護騎士それにコウ、ユーノ以外は行かないんだから平気なんじゃないかな？」

フエイトが言うのと目の前にシグナム達が現れる

「主、準備は整っております。今すぐでも向かえますが…」

「シグナム戦力を半分に分けたいんや、私にコウ君、ヴィータなのはちゃんそれとユーノ君」

「ではこちらはリインフォース、ザフィーラ、シャマル、テストロツサそれに私ですか」

「それが一番バランスがええやろ」

はやてに言われシグナムは了解する

「では主、アギトとリインフォース？はどうしますか？」

「アギトはシグナムとリインは私らと行くんや」

「でも二手に分かれるとしてどこへ向かうの？」

なのはに聞かれはやては地図を出す

「私らの最終目的地は星降る谷や」

はやては地図をなぞりながら線を書いて行く

「でも一般的に星降る谷へのルートは機密らしいんや」

「つまり色々な次元世界を回りながら道を探すと言う訳だね」

「でも下手をしたら道自体がないかもしれへん。それでも行くか？」

なのはは頷く

「なら決まりやなまず、私らは星降る世界へ向かう。シグナム達は

エルガストへ向かってくれ」

「了解しました」

シグナム達は転移の準備をする

「必ずまた生きて会おうね」

「うん、必ず!!」

フエイト達は一足早くエルガストへと向かう

「さあ行くでなのはちゃん」

「うん行こう！」

なのは達も転移する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8560m/>

星魔導伝説

2011年4月8日16時44分発行